

対魔忍 マイ

我楽娯兵

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

正道を違え、邪道に生きる——人外外道が蔓延る未来。誰かが選択を間違えた世界。終わりのない闇の世界に二人の忍が駆け抜ける。少女の名前は七瀬舞、紙を繰る紙気使い。少年の名前は篠原啓二、剛剣を扱う暗殺鬼。彼ら二人はとある廃棄都市に降り立った。

——千島列島南部上空に位置する街『タカマガハラ』。  
人魔外道の吹き溜まりに二人は舞い忍ぶ。

対魔忍アサギ、決戦アリーナの登場キャラクター、七瀬舞のスピ  
ンオフ作品です。

あらすじは今後変わるかもしれません。

2020/01/03

アクション対魔忍に肖り健全な方向にシフトしR18から移動することになりました。

エロ描写は幕間としてR18で投稿します。

# 目次

序章

純白と漆黒

1

第一章

刃を持った子供たち

10

ピース・オブ・ライフ

19

秋空の雨、恋の熟考

27

登場人物／用語解説

36

浮かれる心で絆さる

41

雨天の祭

50

家族の血

59

にじり寄る暗雲の報せ

68

鶴の血

76

## 序章

### 純白と漆黒

「いい夜景、一杯引つ掛けたくなるな」

摩天楼を俯瞰し軽口を発する青年。

美しく煌びやかな都、魔都・東京の輝きは数多の人々を人柱として築き上げられた生命の光。

人と魔の織り成す愚かしき絶倫絶美の果て、欲望の煌きが燦燦と輝き巨大なシステムとして構築されている。

青年は愉しげに背に携えた刀の柄に着いた鈴を指先で転がした。

<sup>128.8cm</sup>三尺四寸の反りの強い鎌倉初期に打たれた古刀。

彼の携えた刀は世間一般で言われる剛剣——その硬さ、重さで相手を一切切完膚無きまでに斬り捨てる刀。

鱧甲色のマフラーがビル風にたなびき、漆黒の中に黄色のラインの入った忍装束がその姿を夜闇に溶かし込んでいた。

「無駄口を叩かないで」

青年とは全く違う忍装束を纏う純白の少女が隣に立った。

真っ白のスリーブレスレオタード姿で、長い長髪も色が漉し出された様に白く雪の様であった。

青年のように武器と言う武器も持たず、全くの無防備。

優雅に肩の装飾である長方形の紙が摩天楼の作り出す強風に靡き、きらきらと輝いた。

その姿は青年とは対照的。漆黒と純白が双方を際立たせていた。

「セオリー通り、俺が先行するか」

「その前に偵察よ」

少女が小さな鶴の折り紙を取り出し、息を吹きかける。

淡い藍色の粒子が折鶴に命を宿し意志のままに動く。紙の翼を羽ばたかせ魔境へと飛び去る。

「どうだ、七瀬？」

「小銃を持った人間、多数。鬼が四人、他魔族多数」

少女は目を閉じ、命宿る折鶴の目を通し悪党の集いを偵察した。彼女の武器は『紙』——紙気と名づけられた、対魔忍の忍術であり秘業であった。

「ちよろいな」

青年は立ち上がり一つのビル、その一フロアの一室に狙いをつける。

ランナーがスタートダッシュを決めるが如く、体勢を低くした。背中に掲げる剛剣を抜き、逆手に構える。構えた剛剣「虚残剣」の刀身より赤い稲光が走り、禍々しく、そして誘惑するかのような色合いで周囲に放たれる。

その稲光は彼の血に流れる。『鶴』に刀身が反応したのだ。

妙に悪ぶり気が抜けた少年の雰囲気切り替わり、手に持つ凶器と同じような鋭利で研ぎ抜かれた刀となる。

少女が青年を僅かに気遣う。

「啓二、気をつけて」

「あいさ、合点承知」

悪党の親玉二人、護衛多数。

片方は人間、もう片方は魔<sup>メタモルフォーゼエルフ</sup>族。ホテルの一室で行われる秘密の会合。

エドウィン・ブラックの子飼い犬、ノマド社の膝元でせこく稼ぐマフィヤたちだ。

「ほんで？ こんな水増ししたシロップでどのくらいの価格設定にするんだ」

人間側はその数を生かした人海戦術で物品の販売に努めている。

「二万でいいだろう。路地裏のネズミにはいい価格だ」

魔族側はその仕入先を取り仕切っていた。

でかいテーブルに置かれた瓶にはそれぞれ一定量の樹液シロップが入れられていた。

それは魔界に自生している木より採取されたもので、非常に甘く嗜

好品としての価値が大きくある。ただし、それはただの嗜好品ではない。異常なほどの中毒性があるのだ。

麻薬のように脳内物質を分泌させるのではない、脳の欲求系に働きかけシロップを摂取したくなるのだ。それに加え栄養価がない上に他の食物が途轍もなく不味く感じるのだ。

その依存性は、医学的には無性から揚げを食べたいと感じるのと同じで薬物からものとは診断できない。巧妙に法を逃れ、罰せられない中毒物質を売りさばいている小悪党どもだ。

「ノマドには悪いが、このシノギは俺たちで仕切る」

「死も、生も、共に『彼祖虚』加護の下にか？」

薄くにやけた人間に、メタモルフオーゼエルフは黄昏れつつガラス張りの壁から東京の夜景を見下ろした。

「魔族を生み出した親眷は今北東の地で暗き闇の中で囚われている。

我が『虐げられし魔族』が全命をとしているが、忌々しい米連と対魔忍どもの横槍が酷い」

「手は回している。烏合の集いだが、武装には困らないように手は尽くしている」

「急がせるのだ。『彼祖虚』はこのまま都市のエネルギーとして生涯を人間の手で筆られる。そうなつては成らない、『彼祖虚』こそ——チエーザレ様こそ魔界を統べれるに値するお方だ」

メタモルフオーゼエルフは暗黒の虚空に手を合わせ祈る。その姿はまさに神に祈りを捧げる信者の様であった。チンピラのほうは呆れ気味にぐるりと中に目を回した。

彼らの言う、『彼祖虚』とは一体何なのか、この様子からすれば宗教集団の一つかもしれない。

そうであっても都市のエネルギーと化している崇拜対象などいるのだろうか。

満月の夜空をふと見上げたとき——影が現れる。

黒々とした影。その影の中に走る鼈甲の波。

窓ガラスを突き破られ、一人の暗殺者が突入して見事な着地をきめる。

口元を布で隠し、眼は炯々と光り輝く。背に担いだ長刀の鞘、それから抜き放たれた剛剣。

日本太古から蠢く影、刃を優先する者、刃の下に心鉄がある。

——即ち、忍。

「なんだてめえッ！」

叫び声と共に無数の銃口が忍者に突きつけられた。

剛剣を腰の後ろに回し、片手で手刀を切っている。

「ドーモ——対魔忍デス」

瞬く間。

忍者の姿が掻き消え部屋に、二人の人間の首が打ち上げ花火の如く舞い上がり血花が咲き乱れた。

只人の目には捉えることなど叶わぬ速度で放たれた剣攻は、忍の手に握られた剛剣により強烈な一刀に昇華され軟な頸椎を斬り砕き胴よりその首を跳ね上げていた。

その姿を捉えられたのはその場にいた魔族の、しかも鬼の上位種のみであった。

驚き隠し切れない表情であった。

それもその筈、忍の動きもまた並みの忍のものより格段に上を行っていた。

最上の殺し屋——まさにこの動きは最強の対魔忍、井河アサギの忍法「光陣華」と瓜二つ。

研ぎ澄まされたその剣は、芸術の域にまで達している。見る者すべてを魅了し、見るの者の歩みを止めさせ、遂にはその生命まで停止させるまで至る。

「タイムニンっ！ 邪魔を……するなあああアツ!!」

魔族側の頭、メタモルフオーゼエルフ魔族の男は叫び声を上げた。

その叫びに反応した僅かな生き残りである鬼達が男を守るように前に出た。

今まで手にしていた小銃をかなぐり捨て、背に隠し持っていた折りたたみ式のグレイブを引き抜いた。

上位の鬼複数、その手に握られたグレイブを見れば誰もが縮み上が

る恐ろしい構図となる。

だが忍は嗤った。嘲た。

ブルブルとほんの一瞬見せた身震い。

死地へと赴いた戦士のみが見せる闘争への喚起の動作、武者震い。

鬼は忍へと向かい走りグレイブを横薙ぎに振る。

軌道としては足首を刈り取るもの、鬼にとって人間の足首など小枝のようなもの。

容易に刈り取られる——だが忍もまた人とは一線を画している。

毒をもつて毒を制す、対魔族に特化した暗殺鬼。人間と魔族の交わりの果てに生まれた人外の種。

下段に構えた刀の背でグレイブを掬い上げる。

天へと掲げられた刀は照明に当てられ炯々と輝いた刀身。鋭い踏み込みと共に上段よりその剣戟が繰り出された。

脳天より股下まで一直線に切り下げる。

斬られた鬼はその意識を瞬く間に奪い去られ、死後の体はズルリと半身が崩れ落ち、その体に詰まった汚物を外に向かい零れ落した。

その膂力、頭蓋か背骨を真つ直ぐズレることなく両断したのだ。

人と違う骨格を持つ鬼の強固な骨を切り裂くその力に他の鬼たちは足を止めた。

「シュー……」

歯を剥き出した忍はその吐息、蒸気を吐く機械のように吐く。

ギロリと向けられた視線の先の鬼たちはその視線に筋を強張らせた。

逆手に構え、走り出す。

そこからは頸を天に打ち上げた人間たちとさして変わりはない。忍の持つ剛剣で切り伏せられ、血を吹くオブジェクトと化している。

すべて巻き藁と変わりは無かった。

——グチャリ……

粘着質な生物の皮膚が擦れ合う音が部屋に響く。

鬼を切り伏せた忍が見たもの、それは奇怪に変容を遂げた何かだっ

た。

「我らの、『虐げられし魔族』の邪魔をするなアアアアアア!!」  
顔は何とか原型を留めていた。その者は魔族側の頭、メタモルフオーゼエルフの男だった。

変容した体に纏わり憑く肉片のようなもの、まるで剥き出しとなった腸のように脈動する血管がグロテスクに蠢きく。有機的な質感の割りにどこか無機質。肉的でありながら機械的。

床に転がったアンプルは恐らくこの魔族を怪物に変容させたものだ。魔界医学の結晶、寄生型のカビ菌を修めた注射器であった。

忍の頭に浮かんだのはクリーチャーの姿はSF映画で登場したエイリアンだった。

体の端々から生えた触手が中を撫で上げそして猛烈な勢いとなって床に転がったアンプルを叩き割る。

「気色が悪いなアもう」

愚痴っぽく忍は言い刀を再度構えなおす。

風を唸らせ振り下ろされる触手を紙一重に躲しながら隙を狙う。

「ここだッー」

触手の隙間を縫い奔り、隙を作り勝機を生み出した。

接敵した忍は敵の胴を逆風に切り上げた。腹を裂かれ血潮を吹き出した。

「グアアアアアッ……アア、ハハハハハハッシ!!」

断末魔が笑い声に代わり気味の悪い声を部屋に木霊させた。

切り裂いた創傷が一瞬のうちに治癒していく。肉が盛り上がり溢れ出ていた赤黒い血がピタリと止まる。

「ガアッ」

恐らく知能も獣並みに落ちているのだろう。

掛け声もすでに咆哮に近い叫びとなり、その眼も空ろとなり意志を持つ生物とは思えないものとなっていた。

力任せの拳で忍を殴りつける。

体を丸め防御するが、その勢いに負け体が宙を舞った。

受身をとって刀をクリーチャーに向けるが、敵のほうが早かった。

すでに目の前にその拳が迫っていた。この拳を食らえば顔面はおろか首の骨がその衝撃に耐えられないだろう。潰れた木の実のように、木より腐り落ちた果実のように見る影も無くなる。

死が差し迫るが、忍は笑った。

——ガキン。

金属を殴りつけたような音が響き、クリーチャーの拳が砕けた。

「ナ、ンダ……」

そこにあつたのは正方形の白い和紙。

その場に静止した紙、微動だにせず折られもせず、整然と浮かんでいた。

「サンキユウ。七瀬」

「遊びすぎ。もっと早くカタが尽いたでしよう?」

幼げな声の少女であつた。

黒色の忍の少年とは対照的、なにかから何まで真反対。

漆黒と純白。青年が武装しているのなら少女は無防備、青年が喧騒なら少女は静寂。

その対極の少女は宙に浮かんでいた。

「ウウ?・ドウ、なつて…ル?」

少女の体には羽も何も生えていなかった。

純白の長髪を靡かせ、まるでその姿は妖精のような雰囲気もあつた。

「どうなつてる? 私はただ忍法で浮いてるだけ」

「ズリイ、絶てえ楽だ」

「啓二、うるさい」

床に降りた少女は特に武器と言う武器は持つておらず、無警戒だつた。

敵が悪意も無く、ただ破壊衝動に力任せに触手で打擲した。

肉体に受けければ皮膚が裂け、肉が削げ落ちるであろう力だつた。

だがその触手は届く事は無く、その周囲の空間に弾かれる。

なぜか、それは触手を弾くものがあつた。

それは——小さな紙があつた。

「私の忍法は『紙氣』。あらゆる紙に対魔粒子を吹き込み自在に操る事が出来る。攻防自在で変幻自在、あらゆる状況に対応できる万能兵装よ」

エメラルドに輝く微細な粒子が吹き荒れ、それに乗せられた紙片が彼女の周辺を廻った。

その紙は意志を持ったように振る舞う。

突風の如く敵の脇を通り過ぎると、敵の体中から血が吹き出した。

「鋭利な刃物から——」

体中に張り付いた紙が敵を拘束し身動きの一切を赦さず、紙の結界に封じ込める。

「動きを止める拘束具に——」

裡に尖り、肉体に刺さった紙は赤みを帯び、煙が上がる。

「その敵を滅ぼす。爆弾にもなる！」

銀朱の輝きと共に敵の体は燃え上がり、弾ける。

耳を裂く炸裂<sup>エクスプロード</sup>。血も瞬時に乾き気化する熱量に包まれた敵はその表面を抉り飛ばされていた。攻撃手段である触手をなくし、皮膚のすべてもむき出しとなり、血を垂らしていた。

膝を着き、血反吐を吐き瀕死に堕ちていた。

首筋に伸びた刀。青年が首筋の上に掲げられた。

「真実はない。俺たちは闇に潜むさらに濃い闇。闇は闇に溶けるべし」

振り下ろされた刀は魔族の首を切り飛ばした。

少年は対魔忍、少女は対魔忍。

人の世界に落とし込まれた闇の存在。

——時は近未来。

魑魅魍魎が跋扈する日本。

人魔の間で太古より守られてきた「互いに不干涉」という暗黙のルール。

人が外道に堕してからは綻びを見せはじめ、人魔結託した犯罪組織や企業が暗躍していた。

しかし正道を歩まんとする人々も無力ではなかった。

時の政府は人の身で「魔」に対抗できる集団。忍のものたちからなる退魔忍を組織し、悪鬼外道の鬼畜に対抗する為にそれらは産まれる。

闇に潜むそれらは冷血に冷徹に冷静に、大義を全うする。

心を殺し、刃を上。

暗闇に潜むそのものは——対魔忍と呼ばれた。

## 第一章

### 刃を持った子供たち

「おいーすっ。七瀬」

「おはよう。啓二」

一週間ぶりの登校に啓二はどこかむず痒さのようなもの感じた。季節は朝方に寒さが目立ち始める頃。五車町へと帰還を果たした啓二と七瀬は平穏とは言いにくいだが、彼らの平穏に戻った。

緩やかな時、特に何も無い。だがその何も無さこそが彼らには実感できる。

何もないからこそ退屈するが、何かがありすぎるとその退屈さが恋しくなる。

平凡な欲求こそ至上の喜び。仲の善い友と過ごす時こそ貴重な時間なのだ。

嫌いな勉強も、馬鹿みたいな言い争いも。

「七瀬、紫先生の課題終わったか？」

「とつくに。写させないわよ」

「……そこを何とか」

「進捗は？」

「始まりだし、ing形で進んでおりません」

通学の道程、田舎道を二人並んで歩く。

緑色の生地のスーラー服の七瀬。俺のほうが身長が高く、必然的に見下ろす形となってしまう。

ふわりと香るラベンダーの匂い、七瀬の匂いで間違いなかった。

七瀬は寡黙だった。どこか冷たいが、そのそこにあるものはしっかりと人間味がある。

俺の心強い相棒、死線を潜り抜けた戦友。そして――

「頼むぜツ！ 七瀬。五分、五分でいい。見せてくれるだけでいい」

「諦めないさい啓二。あなたは馬鹿じゃないんだから、あの程度の課題すぐに済む筈よ」

「いや、そこをなんとか……」

「何とかも何もない。絶対に見せてあげない」

「きー……」

「猿みたいな声上げてもだめよ」

馬鹿みたいに襲い掛かる事を体でアピールしながら声を上げるが、七瀬はそれを軽く流す。

クールビューティー、というのが今は感情が表に出ているほうだと俺は思う。

遠慮がちな七瀬はどこか誰かの影に隠れてしまう傾向にある。慕われてはいる、誰をも唸らす実力もある。だが、どこか、馴染みきれていないような気がした。

「わかったよ。紫先生の単元って何時間目だっけ」

「残念ね。一時間目よ」

もう五年にもなる腐れ縁。運は俺を味方し助けてくれる俺はそう信じていたが。

現実には常に非情である。

「手伝って」

半分懇願気味に俺は七瀬に助けを求めた。

「アンミツ、私と友達二人分、まりちゃん先輩の分も」

「お前と、まり姉の分で手を打ってくれ。頼むっ！」

瀬に腹は帰られない。資金の調達手段のない対魔忍学生には親の小遣いぐらいしか収入源がない。

それに俺は今親元を離れ里親に預けられている。里親に金をねだるなど。

「……わかった。それで手を打ちましょう」

「しゃあッ!! すまねえ七瀬。お前は俺の女神様だ」

「煽ても減らさないわよ」

そこには男の威厳は無かった。

威厳はないが、他愛もない友情があった。

——五車町。

関東圏にある山里。その人口は五百人にも及ばず当該都道府県の条例も満たしていない。

一見すると長閑な土地であるが、国が人口五百未満の場所を『町』と称するだけの理由があった。

対魔忍の隠れ里。

人類の中でその肉体能力のみで人外たちを屠る事の出来る戦闘集団。

ある者は影に潜み、ある者は異常な再生能力を持ち、ある者は光をも超える加速を得る。

もはやそれは人外の類。

だがそれでいい。彼らには志がある、人の意志がある——正道を歩む心があった。

毒を持って毒を制す、血の池の中で更なる血が流れ、浮かぶは怪物の軀。

其処に立つ者たちは闇の底を歩み握る刃で人魔を屠る。

決して歴史が彼らに賞賛の光を浴びせる事はない。

なぜなら彼らは、忍なのだから。

闇に潜み、歴史の光を蝕む。彼らは影、彼らは無実。

真実は無く、常にあるのは——彼らがやったかもしれない骸たち。

今のその性質は変わらない。

彼らが殺す対象が『人間』から『魔族』に変わったに過ぎない。

七瀬舞も、篠原啓二も、その対魔忍の者。

多くの『魔族』を殺めて来た真正正銘の——暗殺鬼なのだ。

しかしながら彼らも人間なのだ。人並みの生活は日本が保障していた。

そのための五車町、そのための五車学園なのだ。

将来活躍するにしろ、しないにしろ、その若人たちを対魔忍に教育し野に解き放つ教育機関。

啓二たちの母校であり、愛しの学び舎だ。

「おーす達郎。任務ご苦労」

背後より啓二は掴みかかった友人。二人とも屈託のない笑顔で話した。

「啓二。重いし熱いって」

「俺様のハグが暑苦しいってか？ いいじゃねえか、短い青春でこのむさ苦しさこそが」

「嬉しくないってっ」

男二人くみずほぐれつ、とまでは行かないが引っ付くのは確かにむさ苦しい。

しかしそのむさ苦しさこそ青春の一時であるのも確かなのだ。二人ともそれを理解しているからこそ無理に剥がそうともしなかった。

他の生徒とはどこか違った経験をしたからこそこういったことが尊い。

「聖修学園に潜入したって？ カー、いいのういいのう。美人多かっただろうなあ」

「任務だしそんなこと……それにゆきかぜもそうだし凜子姉だって大変だったんだぞ」

「淫魔の王が出張ってきたんだろ。寝取られる手前だったんじゃない」

「笑えないよそれ。前の任務のこともあるし」

「俺だってそうだぞ。銃撃戦の中で剣一本」

対魔忍の任務に関しては基本的には部外秘であるが、こうした情報の相互交換がよくある。

身内間での機密性はアバウト。外部には口が固たくとも、内輪ではゆるゆるという事はザラ。

特にこうした学生で任務に就くものたちでは尚の事。

「啓二は今回どんな？」

「情報の収集だったけどな。末端過ぎてまともなモンも収穫なし」

「てことは任務継続？」

「いや？ 切り上げの通達が来てた。だからここにいるんだろ」

「まあそうか……」

心配そうな顔をする友人。

秋山達郎。

対魔忍界限で名を響かせる刀剣術『逸刀流』の家系の次男。逸刀流の達人である姉、秋山凜子の残り滓などと酷い言われようだが彼にも特技がある。

まだ拙さはあるが圧倒的な諜報能力、そして臨機応変な判断能力。俺の幼い時からの腐れ縁だった。

新設された鉄筋コンクリート造りの校舎に戸惑いを覚える。

廊下を渡る足取りは軽くまるで楽しいステップを踏んでいるようであった。

「うーん……この香り、愛しの学び舎だ」

「耳の近くで鼻を鳴らさないでよ。何だかくすぐったいよ」

俺たちのやり取りにすれ違う教室の内から僅かに黄色い声が聞えた。

腐った人たちが勝手な妄想で色めき立っていたのだ。好きに色めておけばいい、俺たちはその程度で無駄な体力を消耗するのは嫌なのだ。

「午後の学科は忍術戦実習だったよな」

「うん、たしか。僕はパスかな」

「諜報特化は学科別なのがいいねえ。聞き耳立てるだけだ」

「諜報戦は現代では肉弾戦にも劣らないほど苛烈だよ。相手の情報がないと軍隊も動こうとしない、対魔忍も同じだよ」

高度に発達した人間社会は直接的な戦闘行為よりも、先んじて相手の情報を得る事こそ戦術的意味を持つ。

資金源もそうだが、相手の購入した兵器、規模、次に行う行動、全てを得ていなければならぬ。

無暗に攻撃をする連中は現代ではない。テロリストですらない、そうした輩は殺人鬼と呼ぶ。

テロリストも一概に馬鹿にできない。奴らも人間だ、知恵をつける。

初めはそれこそ愚連隊だったろう、それが次第に知恵をつけ、金を集め、大陸より軍事行動を知っている傭兵を戦術指導顧問に雇用し、

より軍隊へと近づいていく。

情報戦こそ現代の花形であり、啓二のような肉体労働者は頭脳労働者のお零れに預かっているようなもの。

世知辛い世の中だ。

「気をつけるよ達郎。ここん所、あちこちきな臭いからな」

「そうだね……野党には魔界技術を積極的に取り入れようとしている勢力もいるし、中連は実効支配のてを止めてない」

「米連もだぜ。北方でバチバチするしなあ。ノマドはノマドで何がしてえのかわっかんねえし」

それを最後に二人の間で沈黙が流れた。

どこもかしこも何かしらの思惑が見え隠れしている。

もどかしさ、そしてそれを解決に導けない無力感にも似た虚無感。

一人の人間にできることは限界がある。多くの人間はそれを知り、代りのモノに依存するが。

俺たちのような人種はその他多数よりも実現可能なことが他よりも多いいためにその虚無感は絶大だった。

「やめるか、この手の話……」

「そうだね……」

出来ることが多いといっても所詮は学生。親の庇護に預かる脛が齧りだ。

今できると言えば麗らかで瑞々しい学生生活を満喫することだけだ、ほんの少しだけ風変わりな学生生活を。

「うっし、それじゃあ。また後でな」

「うん。実習気を付けてね」

達郎と別れまっすぐ校舎外の部活棟に向かった。

一室の扉を開ければ野郎どものむさ苦しい筋肉の酒池肉林。

異性や特殊な癖の持ち主であればヨダレものだろうが啓二はそういった事はない。むしろ辟易してやまない。自分のロッカーを開け制服を脱ぐ。

「相変わらずのツチノコだ」

「うるっせ。ジロジロ見んな」

クラスメイトの冷やかし。啓二の何がツチノコなのか。何がと言うか、ナニがツチノコなのだが。

自分の自己評価では啓二はいたって普通だと自負している。見てくれも悪くわないはずだ。

対魔忍という人種であるからに筋肉量も結構ある。

ただ——ナニがデカ過ぎるのは啓二としては悩みどころだ。

男性を象徴し大艦巨砲主義的に大きい事こそ正義と思われがちが、その持ち主としてしまえば程々でいいと思う。

ピッチリとしたズボンを穿けば内腿に異様な膨らみが出るし、定置に戻せばケツから出すもの前に出したと思われても可笑しくない膨らみが出る。

しかも啓二は学生であり、不意な勃ち上がりでも授業中に起きて見る。目も当てられない。

性を意識する時期であるゆえにそういう知識も欲しているからに、大きすぎれば嫌がられるということも知っているし、現に嫌がられた。殆どコンプレックスだ。

いそいそと対魔忍スーツに身を包む。

黒を基調とした対魔忍スーツ。

赤みの強い黄色の線が所どこに走り、対魔鋼と窒化ケイ素の合金で作られた金属装甲で、全体的な見た目は軽装の鎧を思わせた。

古風な鎧に見え、実際は最新技術をふんだんに盛り込んだ技術の塊。

姿勢制御の為に布地の下には形状記憶性を持った超薄型骨格を織り込み、背中の生地には厚さ0.3ミリのバッテリーとフィルムケイブル類。極薄型の基板と純原子半導体の制御機構を内蔵することで効率的に体内の対魔粒子を体外に循環させることによって、対刃性、腐食性、他ももろの防御力を発揮する。

ある意味では対魔忍スーツは強化外骨格と言ってそう言わない。

スーツ全体に張り巡らされたフィルムケーブルに循環している対魔粒子は一種の筋肉のようなもので、米連との技術協力によって、若輩の対魔忍たちは数多の技術的恩恵に預かっている。

校長の井河アサギの世代ならいざ知らず、対魔忍の装備もより高度化し、平均化されている。

ここ数年で対魔忍の業界もいささか政治の臭いがチラついて来ている。

数年前まで古き良き忍者の仕事が、今では一軍隊の暗殺部隊めいた雰囲気醸し出している。

それだけ世間に魔族の存在が認知され始めていることに他ならず、日本の治安もそれに即したものにシフトしている。

「うっし……」

今までは対魔忍のリクルート先は『セクションスリー調査第三部』内務省公共安全庁対魔災三次対策室だけであったが、今では警察に自衛軍、警備会社など防衛に関する業種に引く手数多だ。

無論そういった所に属すモノは大抵血筋も二世代で遡れば良いような時の浅い新参か、分家過ぎて忘却された家名の者たちが殆どだ。

日の出国に根を張る者たちを闇より闇から守護する為に、手を血に染め続けるのが俺のような血筋がはつきりと分かった者たちだ。

恐らく国名が日本から変わったところで、この土地を離れることはしないだろう。

時の政は陳腐なる平和を享受している。その日和った世界を守るのもまた一興。

ゾロゾロと新米対魔忍たちは部活棟を出て、校舎の鉄器受付の窓口に向かった。

鉄器受付、軍施設で言うなら武器庫のようなものだ。銃火器も個人によつてはあるが大抵は近接的な武器を主装備にする傾向にある。

そんなものを箒やバットみたいにロッカーにはぶち込んではいられない。

身の丈を超える斧もある。六尺を超える野太刀だってある。忍術を制御する為のバスターカであったり、鞭も、大型の鎖鎌も、なんでもあり。

しかもそれらが家によつては代々受け継がれてきた家宝である場

合が非常に多い。

その為に五車学園での武器武装地下の保管施設で気温湿度他諸々が緻密に管理された場で行われている。

俺の刀、『虚残剣』と呼ばれている刀も多分に漏れず家宝の一振りであり、打ち出された時を平安と数える。

受付のカードリーダーに学生証を通し、窓口より恭しく獲物が出てくる。

最新施設の目白押し五車学園で、生身の、しかも実戦形式の忍術戦実習は滅多にない。

ホログラム等のVR・AR技術の仮想現実戦闘が専らになり始めているにも拘らず、実戦とは。

今日の講師は井河さくら。現校長で対魔忍の総隊長的立ち位置にいる井河アサギの妹。

年季が違う。啓二は頬を釣り上げ笑った。

「怪我上等、久しぶりに暴れるか」

虚残剣を背に担ぎ、意気揚々と啓二は実習地に躍り出た。

## ピース・オブ・ライフ

舞い散る汗。

吹き荒れる土煙、火花。

激しく唸る剣戟の軌跡、空を切り裂き影を風ぐ。

チリチリと背を焼く気配と共に自身の影が突如として這い上がり鋭利な刃物となる。

虚残剣を担ぎ、背後を守るように地面に振り影を弾く。

甲高い金属のぶつかり合う高音、僅かに遅れて唸る暴風が強烈な衝撃を伴い地面を半円に抉り飛ばした。

立ち込める土埃、日光を遮り薄暗い帳を地面に掛けた。それはもはや『影』ではなく闇の部類。

地面に掛かっていた『影』より人が飛び出してきた。それは軽々と頭の上へ跳ね上がっていった。

すべて啓二が想定していた戦闘の推移だった。地面を抉り飛ばした刀を頭の上に振り上げ、頭の上へ逃げた者を追うために地面を蹴り上げた。

余りにも強く蹴りすぎたために地面は激しい音と共に割れてしまふ。

有り余った身体機能をほどほどに使い。相手が壊れない用にて一撃を放つ。

視界に捉えられたのは若さ溢れる女性。

活発な雰囲気that溢れているが、どこか焦りのある表情であった。

その表情を見れば今の状況がどれだけ逼迫しているのかをすぐに読み取る事が出来た。

優位はこちらにある——この一撃で取る。

脇を絞めて、両手に抱え担ぎ上げた刀を握る両腕の肘を出来る限り標的に向ける。腕に加わるエネルギー伝達点を肩だけではなく、肘を第二の伝達点に変容させるのだ。

そして手首を第三点——最大威力を敵が絶対に逃げられない位置から撃ち込む。

「裂アツツ!!」

振り下ろした刀は暴風雨となり、空気は歪み、裂かれ、なるで爆発のような音を伴い振り下ろした。

「甘いよツッ！ 啓二ちゃんツッ！」

刀に触れるものは何もなく、刀にも防がれた感触も返ってこない。

土煙を抜けた啓二はその理由を捕らえた。幾つも宙を舞っていた土塊、日光によって作り出された底辺部のまさに『影』と呼べる面がそれが一切を理解させた。

宙を舞う無数の土塊の影一つ一つに、それが潜んでいる。

教官——井河さくらが。

刀を振り、自由落下で舞い落ちる土塊から伸びる刃を何とか弾く。

だが自身に加わった飛翔のエネルギーは消えることなく、漆影の棘の森に突っ込んでいく。

体が動く限り、頭が働く限り、全霊を絞り刀を振るが凌ぎきれない。

身を裂く影、体に刺さる漆黒の棘。

啓二は受身もろくにとれず頭より落下した。

「フンツツ！」

クソをヒルように下腹に力を込め頭上に剣を突き上げる。

ガツ、と重苦しい音と衝撃が骨を伝いくる。思わず肘を折りそうになるが折れば柄頭に脳天を割られるのが目に見えている。

衝撃を全身へと伝えるように足を振り回し、回転力を利用し鞠の跳ねるその姿を真似るように体を躍らせ土煙の中より飛び出た。

見誤った——悟り後悔が先行するよりも先に次の一手を巡らせる。

井河さくらの忍法「影遁」の精度を甘く見ていた。

影とは何も地面に落ちるものだけが『影』とは言わない。遮蔽物が日光を遮り光度が落ちている個所が影なのだこの時啓二は初めて理解した。

新たな知己を得たようだ、目から鱗だ。

「いや待て……じゃあ……」

背筋に這い登る悪寒とその主の放つ闘気に充てられ、油の差しが悪い螺子のようにぎこちない首の動きでそれを見た。

フスーフスーと荒い鼻息を鳴らす漆黒の熊が直立しており、二メートルを優に超す巨体がこちらを見下ろしていた。

「ご、御機嫌よう……」

『G A A A A A A A A A ツ!!』

雄叫びとともに横なぎにそのモフモフの、いや、鉄の棒のような筋肉質な前腕が啓二を殴り飛ばしていた。

猛烈な勢いで視界が、意識が、脳味噌が揺れた。

(あんなのアリかよ……ま、一杯食わせてやった)

土囊の壁に激突し、背骨の軋みを体感しながら啓二は意識を飛ばした。

「あんなのアリかよ。普通全力でぶっぱするか?」

学業という苦行を終え、帰路に就く啓二。

いつもの忍法研のメンツと言えはいいのか、仲良しグループの数人と寄り道の楽しみを満喫していた。

夏も終わり、そろそろ秋かと思う今日この頃であるが残暑もひどく、未だに体に絡みつくような暑さは健在であった。

五車町にある学生の憩い場である稲毛屋の軒先で啓二は座り込み、アイス『ドロドロくんクロクマ味』をガッツつく。実戦演習の愚痴を溢している啓二の姿に笑いながら鹿之助は餡蜜をパクついていた。

「あの状況でお前を制圧するんだったら、影熊の一撃が最適解だ」

「それでもこの打ち身を与えることってあるか? ぜってー明日まで痛むぞこれ」

「啓二ちゃんの回復能力は異常だから、それを見越してのさくら先生の判断だと、私は思うなー」

鹿之助の隣に座る女子、蛇子の言い分も確かだった。

二人ともベンチに座り稲毛屋二大名物の一つ餡蜜を食べていた。

顔だけ見れば二人とも華やかな見た目であるが、如何せん片方は凶暴であり、もう片方は付いている。そう言った趣味趣向を持っていない啓二にとって二人は友にしかない存在だ。

何よりも大切な友という存在だ。

「にしても、あそこまでよく動けるね。啓二は」

木にもたれ掛かった達郎が、感心したように言う。

ドロドロくんの練乳ベースのスムージークリームを口に頬張り、棒に書かれた『ハズレ』の文字に残念そうな顔をチラつかせた啓二は、ゴミ箱に向けハズレ棒を投げた。

「俺は頑丈にできてんだ。ガテン系だからな」

「啓二の忍法はなんだっけか？ 異能系だったけ？」

鹿之助は餡蜜のサクランボを口の中で転がしながら言う。

「多分な」

対魔忍と忍者を区別するのに明確な線引きは数年前まで確立していなかった。

魔と対する事だけならば、銃を持った一般人と俺たちは大差はない。銃を持てば魔と『対』することは誰にでもできる。

しかしそれではいけない。明確な区別が必要だ。

そしてその区別の方法が、忍法だ。

忍法、しのぶほう 厳格な法りに従い世を遠ざける。即ち忍法だ。

ただ俺たちの忍法は撒菱まきびしを撒き手裏剣を投げるだけではない。

対魔の一族には人間ならざる人外の業わざを持っている。

殆ど超能力の類だが、超能力と命名しては響きがよくない。そのため『遁』、隠れ忍ぶ技に準え、隠れない人外を退けると命名した。

対魔の家系の人間ならば誰しもがその力を潜在的に宿し決定づけられている。

鹿之助の『上原家』は代々電気を操る力『電遁』を持っている。

蛇子はその肉体を獣と転身させる『獣遁』を、達郎は風を操る『風遁』を持っている。

誰もがその業わざを第一次成長期終了時に背負うことになる。

しかしながら俺は、篠原啓二は特質すべき忍法を未だにこの体に背負うことがなかった。

確かに他者よりも運動能力は秀で、最強の対魔忍『井河あさぎ』と肩を並べ。回復能力は次代の対魔忍総隊長『八津紫』も少し劣るぐら

いと言う位だ。

しかしながらそれは忍法による才覚ではなく、ただ単に肉体が他者よりも頑丈に出来ているというだけの違いだった。

『異能系』と呼ばれる身体機能強化、精神作用系と区別すれば早いのだが、もつと科学的な側面から見れば忍法発動時に肉体から発せられる『対魔粒子』と呼ばれる素粒子が確認されていないのだ。

それ故に魔界医学の権威である『桐生佐馬斗』ですら匙を投げる始末だ。

この事は五車学園、延いては五車町に措いて限られた家系の人間しか知らない。

この場で知っている人間は俺だけだ。

「そう言えば、そろそろ雨天祭じゃないの？」

「おお！ そうか、そうだった！ ってまだ一か月ほど先じゃね？」

「今朝、琉子衆が五車に入っていたよ」

「マジか……」

啓二は面倒くさそうに頭を掻いた。

五車町が出来て、『ある一族』が合流して以降、この町では夏の終わりにある祭りが毎年行われている。

——雨天祭。

合流した『ある一族』の次期当主を決める一族会議だったのだが、如何せんその一族の規模が他の一族よりも規模が大きく、当主が襲名した際に分家の人間たちが馬鹿騒ぎをし始めた事から五車町民もそれに肖り騒ぎ出したことから祭りとなった。

イベントごとには滅法弱い日本人の息抜きの場合だ。

「……サボるか」

「逃がさないよ。啓二」

啓二の腕を掴んで離さない達郎の目はマジだった。

致し方ない事だった。雨天祭は経済の滞りやすい山村の五車にとってまたとない機会だ。

日本各地に散り、国内の魔族の情報を収集する『琉子衆』が集結するのだ。

貧困にあえぐ対魔学生にはいい鴨だ。部活連は出店を立てることで躍起になっている。

啓二や達郎他が所属している忍法研も出店をしようとしている。残念ながら俺は参加できるほど余裕がなかった。

「許せ達郎！俺は用事があるんだ！」

「なんだよ用事って！ どうせ疏子衆りゆうこしゆうの人をナンパでもする気なんだろう！」

「……ッ！ナンパなんてするわけないだろう！ かわいい子を見て鼻を伸ばすんだよ！」

ナンパなんてするつもりは心の底から毛頭ない。

何せ俺にはできない理由があり、その理由は俺たちのような人種にとって最も弱みになりやすい。それ故に力強く反論した。

「七瀬に首つ引きの啓二がナンパするわけないだろ達郎」

ジトつとした目でこちらを見た鹿之助が、爆弾発言を炸裂させ啓二の抱える弱点をさも当然のように言い放った。

蛇子はポツと頬を赤く染め、妄想猛々しく黄色い声を上げながら体をくねらせた。

「啓二ちゃんは男前なのに奥手だからね」

「奥手とかそんな女々しい方やめろう！ 硬派と言え！」

「告白する勇気がないだけだろう？」

遠慮も慎みもなく、深く心理を付く鹿之助に啓二の眉間は青筋が浮かぶようだった。

凶星の逆上めいた喚きを上げているのは理解しているが、喚かずにはいられない。

小さな青年の小さなプライドだった。

「うるせえうるせえ！ 大体鹿之助おめえも似たようなもんだろ！」

愛しの神村にラブレターの一つも出したのか！

「せ、先輩は今関係ないだろう！」

「愛おしい舞華先輩、ぼくの彼女になって下さい。とも言えねえ男の娘に俺をとやかく言えた筋じゃねえよなあ？」

ケケケケケ、と妖怪めいた薄ら笑いを上げマウントを取ろうとする

啓二の姿に達郎は深いため息を付いた。それを見逃さないのがジェラシーに焦がれる青春男児たちだ。

「おんやー、達郎君はゆきかぜとの進展が合ったご様子。どう思われる鹿之助殿」

「いやいや達郎だぞ。奥手も奥手、現状維持の衰退を希望する」

深いため息はさらに深く、達郎は話のズレを戻した。

「話をずらさないでよ啓二。忍法研の出店、出れるの？」

「……………」

僅かな沈黙で答えた啓二は、瞬く間に座り込んだ体勢から猿の如く、両手両足で野を駆け逃げた。

「逃げたな！ 啓二ちゃん！」

「悪いな蛇子！ その日は外せねえ用事なんだよ！」

さつさとずらかる事を即決した啓二。

俺の身体能力に付いて来られる奴は幸い忍法研にはいない。

今も、昔も…………。

蛇子たちから逃走し家路につく中、夕日に染まりつつある空を見上げ鞆から取り出した出店の計画書を見た。

例年通りにタコ焼き屋をやる気であるようだった。

「蛇子がタコ焼くんじゃあな…………自分焼いてるようでなんか変な気分分で食わなきやならんからな…………」

蛇子の忍法『獣遁』の転身した姿は何を隠そう デビルフィッシュ、『蝮』だ。

両足をタコの触手に変え墨袋を臍腑に加える忍法なのだが、蝮に姿を変える対魔忍がタコ焼きを売る姿は——少々中に入っている切身のタコが恐ろしく思える。

と言っても啓二はこの行事は参加することはない。正確にいうのならば参加できない。

五車の人間でも五十人もその理由を知る人間はいないだろう。

それだけ俺の『家系』は秘匿主義なのだ。

毎年だが雨天祭の日の夜は家の用事がある決まりだった。

生まれてすぐ里親に出され、顔も臍氣にしか覚えていない家族。

家名を名乗るより、『篠原啓二』という名前が板に付き過ぎている。「俺は、篠原啓二……じゃない、か」

五車学園に入っつてすぐ、中等部一年で知らされて五年目になるがその実感は未だにない。

戸籍だつて篠原だし、銀行口座も、パンツの名前だつて篠原だ。

俺がもつとも古くから覚えている記憶でも苗字は篠原だ。

何より衝撃だつたのは俺が親や、まり姉と血がつながっていない事だつた。

まり姉とケンカしてボコボコにされたし、小さかつたが風呂も一緒に入つた記憶もある。

よく遊んで一緒に飯も食べた。ナニも見られ赤面したし、俺の好きな七瀬のことも知っている。

深く考えるが、心に浮かぶ言葉はなく、モヤモヤとした感情だけだつた。

茜色に染まる空を見上げて、ため息を付いた。

「出店、一回やってみたいな……」

## 秋空の雨、恋の熟考

午前の授業を終えるチャイムが校舎に鳴り響き、ゾロゾロと学生たちは昼食を仲の良い者たちとともに食べ始める昼下がり。

啓二も持参の弁当を持ち、忍法研の三人と食事をとろうとしたが。「まさか三人とも予定があるとはなあ……」

啓二は屋上に上がり、昼食をとることにした。

校舎というのは屋上が解放されていないものらしいが、五車学園は解放されており一人寂しく弁当を広げだしていた。

他にも屋上には生徒がいたが、グループとして確立されていてしまいい啓二の入り込む余地は残されていなかった。

「寂し」

入口の屋根、給水塔の影で涼みながらそう呟いた。

おかつの鮭の竜田揚げを頬張りながら、グラウンドで暴れん坊女將軍こと眞田焰が火遁衆の後輩をどつき回している姿を見て戦々恐々とする。

昼食を終りにあのオーバークは遠慮願いたい。

あの先輩はこの学園きつての戦闘狂だ。戦えるのなら金を払ってでも戦いたがる手合いだ。

イカれた奴というのが生徒間では定説だが、啓二からしてみればあれでもまだ理性はあるほうが。

どつき回されている後輩たちはどれも動きがよく、特質すべき能力を備えた者たちばかり。眞田先輩の相手をしても死なないことが約束されている。そのことを見極めて眞田先輩は訓練と称した荒行を行っている。

少なくとも俺はそう見える。俺もその訓練に巻き込まれる可能性はあるが……。

「今日は平和に過ごせますように……」

他力本願な祈りを思いながら白米の美味さを噛み締めた。

「やっぱりここにいた」

不意に声を掛けられビクッとしてしまう。

肉体派の眞田先輩のことを考えていたため、取り巻きの火遁衆の無理強い行為かと少々及び腰だった。

だがその心配は思い過ごしであり、現れた人物は警戒することのない者だった。

ふわりと紙気の恩恵を受け、和紙を足場に優雅に浮いていた。

「七瀬か……ビツクリきせんなよ」

「ビツクリって、なにに？」

視線をやり炎を巻き上げ高笑いを上げる厄介な先輩を示した。

ああ、と納得したような顔をした舞は理解を示す。

隣に腰を落ち着かせた七瀬の手には購買で買った昼食の紙袋を持っていた。

「また巻き込まれたの？」

「いんや！ 任務前は巻き込まれた」

「断る勇氣も世間では必要」

「意味の前に言葉が通じたら苦労はしてない。あの人の言葉は知性的言語じゃなくて肉体言語だ」

「焰さんはそこまで凶暴な人じゃありません」

購買の紙袋を開け、クリームパンを一齧りする七瀬。

啓二は疑わしそうな目で一瞬だけ七瀬を見た。啓二は知らなかったが七瀬舞と眞田焰は共通の話題を持っている為に仲はそこそこ良かったのだ。

「七瀬の昼飯はいつも購買だよな」

「そう……ね。私は一人暮らしだからどうしても購買に頼りがちになる」

「この購買は時間を問わず開いてるからな」

政府の手厚い支援のあるこの町には日本全国から対魔忍の素養を持つものを移住させている。

自立を志し単身移住してくる者もいれば、能力影響で両親に気味悪がられた者から、ただ単に貧乏な奴。四人十色の理由を抱えている。七瀬も親元を離れこの街に中学の頃に移住してきた。

生活支援を目的として購買部は朝夜問わず開き、そこそこの量を安

働で提供しテイクアウトまで出来る充実ぶりだ。たまに俺も家事に手が回らない時にお世話になっている。

「栄養偏らないか？ 量はあるが惣菜の域は出ないだろう」

「夜はサラダも食べてる」

ムスツとした様子で答えてパンを食べきった。

「更だったってこの野菜サラダってカットレタスと紫タマネギのスライスだろ。味気ねえな」

「お母さんみたいなこと言うのね啓二は」

「相棒<sup>バディ</sup>だからな。相棒の体調管理も俺の務めだ」

弁当をかつ込み、お茶で胃袋に流し込んだ。

「お前とつるみだしてもう五年目ぐらいか」

「四年と九ヶ月よ」

よくよく考えれば中学入りたての頃からこいつと相棒<sup>バディ</sup>を組んでい

る。基礎能力だけで上り詰め天才の俺とは違い、天稟を者とした天才少女はある意味では対極に立つ存在と言える。N極S極が引かれ合うのは自然の摂理。未だに忍法の顕現が成しえていない俺にはいい教本だった。

「よっしゃ決めた。今日の夕方暇か？」

「図書委員の仕事以外、特に予定はないけど……」

「そうか！ 今日俺の家に来い。飯作ってやるよ」

「え？ でも私がいたらまりちゃん先輩もご両親にも迷惑じゃ……」

「心配ご無用だ。親父たちは任務でいねえ。まり姉も七瀬なら大歓迎だろうよ」

立ち上がった俺は献立を考えながら弁当箱を片付ける。

「人参とか余ってるから今日はクリームシチューな。結構大量に作るから少し持って帰れ」

「ちよっと、行くなんて言っていない」

「放課後まり姉行かすから来いよ。相棒」

遠慮のし過ぎな七瀬にはこの位の強引さが円滑に進めるコツだ。

能力はあるのに他人の影に隠れてしまうのは玉に瑕だ。もつと表

に出していかないといけない。

俺で慣らしておく必要がある。

本気で嫌なら紙気で殴りつけてくる。殴りがないということは満足でもないということだ。

「篠原弟一ツ!! 給水塔に隠れてないで降りて来い!!」

ものすごい肺活量でグラウンドから啓二を呼びつける眞田に、肩を震わせ驚き落胆したようにため息を吐く。

「仕方ねえなあ、食後の運動とするか……。じゃあ七瀬、放課後にな  
〜」

「ちよつと、返事もしてない」

屋上から飛び降り、訓練を始めた啓二の後ろ姿に髪を弄りながら舞は呟いた。

僅かに髪に汗の匂いがした。

「……身だしなみくらい整えさせてよ」

学校も終わり放課後のゆつとりとした夕刻。

啓二の顔は綻び、足取りはまるでダンスでも踊っているようだった。

「あー……ドキドキする」

七瀬を家飯だが誘い、少しでも共に過ごそうと画策しそれが成功した。

本当に思い切ったことをした。誘った時は顔から火が出そうだった。

だがのど元過ぎればなんとやらだ、過ぎたならば晴れやかだ——成功したのならばだが。

献立の食材自体はあるし、部屋は綺麗だ。七瀬が来る時間帯を見計らって帰ればちょうどいいくらいだ。

川沿いの土手をスキップでもしそうな足取りで歩いていると、川岸に見知った人物がいた。

土手を下り、話しかける。

「虎ジイ。戻ってきてたのか」

黄ばんだお遍路の白衣に、虎柄の袈裟を下げ、腰には蛇革の巾着を下げたボケ老人が大量の薬草を燃やしていた。

本土<sup>りゅうごしゅう</sup>疏子衆棟梁。沙良虎二だった。

御年百十になると風の噂に聞く不死身の翁。前大戦の真つ只中に中華連合東部で生を受け、大陸の魔族と殺り合った伝説が今でも語り継がれている。

アサギ校長が生まれる以前は『最強』の名は彼が持っていたとも。

「お……………」

「え？ なに？」

蚊の鳴くような声で応答する虎ジイは巾着から手巻煙草を取り出し、薬草の焚火にかざして火を付ける。

甘ったるい香りのする煙草は同時に危なっかしい香りもしたが、気に留めてはいけない。

スーツと煙を肺いっぱい<sup>い</sup>に吸い込んでぼわっと口から紫煙を吐き出す。

焚火の煙と煙草の煙が一緒<sup>い</sup>くたになつて空へと昇つてゆく。

「……………い……………お……………」

「お、おう」

聞き取ることでできない虎ジイのモゴモゴとした声を適当に返答してしまう。

この爺さんも対魔忍の中ではかなりの重鎮<sup>い</sup>のだが、ガキの頃の付き合いでどうにも口調が砕けてしまう。

「雨天祭の準備？ 昔は取り巻<sup>い</sup>きがい<sup>い</sup>たのに今日は一人だ」

「……………」

しゅんとした様子で、薬草を焚火に投げ入れる虎ジイは寂しい様子だった。

明日の雨天祭の為の降雨準備。

あたりを見ればあちこちから白煙が立ち上っている。

名前に雨天と名の付く通り、雨の日の夜に行われる。だが秋雨ほど予想の付かないものはない。

当日に雨を呼び寄せるためこの日の為に栽培された薬草を使い、大気の流れを知り雨を降らせる為に降雨の下準備をしているのだ。

明日の五車の町は間違いなく土砂降りになる。

「俺があそこに出席して五年目だ。代替わりせず出てくれているの虎ジイだけだ」

「……………」

聞き取れない声で返事をする虎ジイ。もう耄碌もろろくしてしまっている。

いつ死んでも可笑しくないが、この爺さんだけは死にそうになかった。

「今年で俺も襲名だ。虎ジイは奥宮に行くのか？」

「式……………」

「そうか……………」

式という言葉だけどうにか聞き取れたが意味は分からなかった。

今年の雨天祭は俺にとっては人生の岐路に立っているようなものだ。

家名を継ぐための……………」

「じゃあ行くよ虎ジイ。雨天祭で」

時間帯もいい頃合だ。軽い挨拶をして土手を登り帰り道に戻った啓二。

虎二はモクモクと立ち上る白煙を見上げながら、手巻煙草を焚火の中に投げ捨てる。

「御目出とう御座います。御当主殿」

大書庫と言ってもいい規模の学園地下に広がる図書室で本を読み漁る少女がいた。

頁を一枚、また一枚と捲り内容を読み込むが少女、七瀬舞の頭に入ってこなかった。

舞の頭は本の内容を取り込む余裕がなさげで、文字を目で追っているだけであった。

「…………頭に入っていない」

ぱたりと本を閉じ、表紙を指でなぞり頬杖をついた。

今読んでいるのは伊坂幸太郎著『死神の精度』という小説だった。業務的な地の文にも拘らずどこか小さな楽しさを一つ一つ探っていく感覚。どこかから雨音が聞こえてきそうな静寂をもたらしてくれ何度も読み返した本だった。

しかし今の舞にはその静寂の中から浮き彫りになる小さなワクワクよりも、喧騒ただ中にいる興奮に似た昂ぶりを感じていた。

「……………」

時間的にろくに準備もできない。

準備する必要もないのだが、身嗜みが気になってしまった。

「……………はぁ」

吐息にも似たため息が漏れる。

小さい声は静けさに覆われた図書室の空気に解け消える。

啓二のアホ面が浮かんだが頭を振ってかき消した。どうしてあんな奴にこうも気苦労しなければならぬのか、煩わしい、そう考えたらその根っこにある感情だけは消えそうになかった。

篠原啓二。

七瀬舞のパートナーにして、この町に越してきてからの初めての友達。

11歳の時とき学生寮に一般人枠から入って馴染めなかった私にからかい半分で係わってきたであろう存在は献身的に私の面倒を見てくれた。

親に気味悪がられ厄介払いでこの街に送られ、泣いて過ごしていた初めの頃。彼はケタケタと笑って執拗に絡んできた。

私を苛立たせ、煩わさせ、笑わせた。

(七瀬暇だろー！ 遊ぼうぜー！)

思春期真っ盛りで男子グループから弄られながら彼はおちやらけていた。

きつと恥ずかしかっただろうし、私と係わっても楽しくなかっただろう。

だがこの五年間、彼は私の近くにいた。

(……………どうしてだろう)

鶯模様の葉を指で遊び、どうしてかと考えた。きつと答えは出ないと結論は出ているが考えずにはいられなかった。

どうしてだろうか？ 客観的に考えよう。

人間は損得で行動する人間が大概だ。彼が私と係わって得することとは？。

「話相手……………」

候補を呟いてみるがあまりにも馬鹿馬鹿しい。彼と私では毛色が違い過ぎる。

だがそれ以外に候補は思いつかなかった。

私は自覚のある不愛想であり、自分の趣味フェイールドでしか活力を得られない典型だ。

本の虫である私に、本を読まない啓二は付き合いづらい人間だろう。

では損得抜きで考えてみよう。

善意？ まさか。自分本位の彼が？。

じゃあ悪意？ 多分……………違う。

五年もかけての意地悪ほど根気のいるものはないだろう。

席を立ち、返却された本を忍法の力を使い本棚に戻していく。

七瀬舞と篠原啓二の関係性については堂々巡りだ。

手近な本棚の埃を払いながらとある本に目が留まった。その本のセリフが頭をよぎった。

——愛の定義は与えることだ——

まさか啓二は私のことが好き？。likeではなくloveで？。

ポツと顔が熱くなる。まさかそんな、啓二に限ってそんなことがあり得るのか？。

体が熱かった。座り込んで頬に手を当てれば熱を持っている。

なんて浅ましい、こんなのか勝手な妄想だ。……………妄想だ

「舞ちゃん？」

「はいッ！ー！」

裏返った声で返事をしてしまい声を掛けてきた者が驚いた顔をしていた。

啓二の姉。篠原まりだった。

同級生であるが、対魔忍歴の長い彼女に敬意と愛称を込めてまりちゃん先輩と私は呼んでいた。

「蹲ってどうしたんです？ 具合でも悪いの？」

「い、いえそう言うわけでは……」

立ち上がってスカートの裾を手で払い、身を整えた。

「良かったー。ねえ？ 舞ちゃん、啓二ちゃんから今日の事聞いている？」

「え、ええ一応」

「ごめんね。啓二ちゃん強引だったでしょ。啓二ちゃつは舞ちゃんの事に掛けるからちよつと強引なの」

まりちゃん先輩の言葉にまた体温が上がりそうになる。

駄目だ、これは私の変な妄想だ。

「今日のご夕食、ご一緒に構いませんか？」

取り繕ったように凜として答える舞にまりは笑顔で答えた。

「もちろん！ 一緒に食べたほうがおいしいよ」

## 登場人物／用語解説

登場人物／用語解説

—— 人物紹介 ——

・七瀬 舞

無数の紙を身体や衣装に隠し持ち、その紙を戦闘に使う対魔忍。

無数の紙を身体のおちこちに隠し持ち、その紙を戦闘や隠密行動に使う対魔忍で、彼女の能力は紙に対魔粒子と自然エネルギーを注ぎ自在に操るというもの。

強化された紙は雷撃の対魔忍の雷にも耐えるほどの強度を得る。彼女の能力は攻守共に絶大な力を有し、その能力を使うための身体能力も高いスキルを有している。

その能力の高さにアサギを初め多くの実力ある対魔忍達をもうならせる実力を有している。

そんな彼女は皆に慕われているがどこか遠慮しているような感じで、さくらやゆきかぜのようなズケズケと自ら告げることができず自分からは自発的に発言するようなことはない遠慮しがちな性格である。

対魔忍粒子を封入した呪符紙を用いた紙忍法の使い手。

五車学園では篠原まりや清水神流などと仲良く学園生活を送っており、皆から『舞ちゃん』と呼ばれ親しまれ、篠原まりのことは同級生にも拘らず『まりちゃん先輩』と呼ぶ。

ちなみに本当の先輩である清水神流のことは『かんちゃん先輩』と呼んでいる。

一代で芽生えた対魔忍で五車町に超してきたところ、お隣さん（10キロ先）の篠原啓二に惚れられ中学時代からの腐れ縁。

クールビューティーを貫いており、無表情に徹しているが篠原啓二の軽い態度に疲れ気味。

近接戦一点突破の啓二に代わり、サポートに徹している。

・篠原 まり

五車学園に通う学生対魔忍であり、ゆきがぜとは別のクラスで委員長をしている。

対魔忍の中でもバカ力の持ち主で、忍法として土遁を使い自在に土を操ることができ、自身の拳と土遁の術を掛け合わせた戦闘スタイルを得意としている。

持って生まれた力をさらに発揮する為の新型専用武器の試作品を装備しており、これには一卷に一つに技が封じられた巻物弾を使用することで土遁以外の技を使うことが可能になっている。

身体能力の高さもあり学生でありながら任務にもよく出撃するが、若干ドジなどところがあるのが玉にきずである。

紫のようにクールでカッコいい感じになろうと考えるも、周りからは絶対無理と言われている。

明るく笑顔が似合う少しドジでおつちよこちよいな性格で学校ではクラス委員長として毎日頑張っている。

啓二とは血の繋がりは無いが幼少期から強大として育てられ、関係は良好である。

#### ・篠原啓二

五車学園に通う対魔忍見習い。

見習いとは言うが実力は現役の対魔忍に似も勝るとも劣らない実力を持ち、数多くの任務を成功させている。潜在的能力は最強の対魔忍井河アサギにも匹敵するとまで言われているが未知数。

性格は非常に軽いくおチャラけているが、義理堅く正義漢。

筋肉質な体つきをしておりモテるが、七瀬 舞一筋と決めている。

巨根で、過去それが原因で付き合っていた彼女と別れてしまいコンプレックと考えている。

血筋に事情を抱え、現在は篠原家の養子として出され本名は本家襲名まで伏せるようにと言われている。

関東圏にある対魔忍の為に作られた山里。人口規模に明記はされていないが五百人未満と推定される。

政府の意向で対魔族の精鋭『対魔忍』の為に建築された町であり、公共施設は充実しているが娯楽施設等は不足している為に学生たちは隣町まで遊びに行くことがよくある。

若年の対魔忍見習い達の為、五車学園を設立し学生たちは日々通っている。

学園の施設はかなりのもので体育館、プール、L字校舎、別棟、地下に巨大戦闘シミュレーター、図書館に匹敵する大型の図書室を設備している。木造建築物が目立ち、学園一部家屋を除き大抵が木造家屋である。

#### ・忍法研

五車学園で設立された学生研究部。対魔忍が個々に宿す忍法を研究と強化を目的とした部活である。

一般的な部活動等はあるが帰宅部というモノの存在しないため、入部届を出していない生徒は強制的に入部させられるが大抵が幽霊部員である。

現在所属し尚且つ出席している生徒は相州蛇子、上原鹿之助、秋山達郎、篠原啓二だけである。

#### ・雨天祭

五車町に沙流鳶家さるとびが合流してから秋口の雨の夜に開催されるようになった祭りである。

沙流鳶家で代々行われる行事であったが、各地から沙流鳶を本流とする対魔忍が押し寄せ騒いだことで五車町での町興しになり縁日の一つとなった。

本来は関西圏の隠れ里で行われる筈の沙流鳶分家たちのお見合いと次期当主襲名式であったが、日本政府の対魔忍集結要請で渋々集結。

沙流鳶家は対魔忍の中でふうま一族に次ぐ最大規模の家系で、影響

力があつたため政府に脅しをかけ他の対魔忍の家系から血を寄越せ、嫁を寄越せとせびり、一部では乱交祭、オフパコと揶揄されている。沙流鳶宗家宅の山道は出店が立ち並び、五車の経済を回すいい機会になつている。

#### ・沙流鳶家<sup>さるとび</sup>

鎌倉時代から脈々と続く古参の対魔忍一族。

対魔忍一族の中では最大級の名家であり、甲河家とふうま家とはそれなりに繋がりがあがるが基本的に無関係を貫いている。

歴史上、唯一日の目を見た者は猿飛佐助であるが、それは「魔」を対峙したと言うものではなく「人」を殺めた事である為に忌み嫌われている。

明治維新時代諸外国からの魔族流入に伴いその武力を更に高めるべく、近親間での相姦が数多く行われ力が微量でも勝るものが

産まれればそのものが当主となり、途轍もない速度で世代交代が起き現代の当主までに至るまで358代の世代交代が行われた。

昭和に近親間での当主創製は倫理的に問題と弾劾を受け、現在は行われてはいないが、近親間での結婚はいまだ行われている。平成初めまで関西の隠れ里を拠点にしていたが五車町の誕生で政府の招集が行われ、渋々五車町に移り住んでいる。現在はふうま家の壊滅により、実質的な最大家系として対魔忍を排出している。

他の家を鳴り物入りの中途半端共と見下す傾向にあり、現当主は緩和的であるが、他の分家はそうでもない。

家紋はトラツグミが一羽舞った柘紋。

#### ・虚残剣

又の名を『無を絶つ残り霞の剣』。

沙流鳶宗家に代々伝わり、当主が携える反りの強い三尺四寸（128・8cm）の切っ先諸刃の鑄造、地肌は杳目肌で刃文は皆焼刃の日本刀である。

銘の部分には刀匠名の代わりに『逢佛殺佛、逢祖殺祖、逢羅漢殺羅

漢、逢父母殺父母、逢親眷殺親眷、始得解脱、不與物拘、透脱自在』と切られている。

玉鋼に対魔石と鋼と魔族の一部を練り込まれ、魔に対する攻撃力は絶大であり刃が届くのであれば魔神すら殺しうるとまで言われる大業物である。

沙流鳶当主の血に反応し赤黒いスパークを放出し、斬りつけた魔物の力を奪い取る力を秘めている。

#### ・タカマガハラ

択捉上空に建造された超大型上層構造居住人工都市の総称。

日本、露帝の人口増加によって過密となった択捉島の土地問題の解決案として提示され建造された人工空中都市。大きさにして択捉島をすっぽり覆い隠すほどの巨大さがあり、八本の支柱でその都市重量の全てを支えられている。

その構造上、択捉島に永遠に陽光が差さない様になってしまっているが倍以上と成った土地で市民の不満は握りつぶされている。

タカマガハラは立地条件的に浄水施設や発電施設の設置が不可能である為に、適時摂取都市循環型高効率熱量変換電力タービン一基で都市の全ての電気力、水道事情を賄っている。

本来は抽選された市民のみが昇る事を許す筈であったが、選定期間中に大規模な人口流入が発生しその際に魔族やマフィアなどの犯罪者が紛れ込み、日本各地に点在する違法都市と肩を並べる街となってしまった。

ただ他の違法都市とは違い、行政と呼べるものが存在し土地の管理を露帝、治安警備を米連の軍事警備会社が引き受け、本来の択捉島の管理を日本の環境省が行っている。

浮かれる心で絆さる

「ただいまー!」

「お、お邪魔します」

まりちゃん先輩に連れられ、篠原邸に到着し玄関の敷居を跨いだ。平屋建ての小ぢんまりとした木造建築。趣はまさに京町屋と言っているほど風情があった。

年季の入った色をした柱たちが舞を出迎えた。

玄関先まで香る匂い。ふわりと鼻腔を撫でる香りは僅かながら和の雰囲気とは懸け離れた洋の香り。

「おつかえりー。もうすぐ準備できるぞー」

澆刺とした啓二の出迎えの声が匂いの下からする。

「舞ちゃん、上がって上がって。遠慮なんかしないでいいから」

やけに嬉しそうなまりに促され、しずしずとした様子でローファーを脱いで篠原邸に上がった。

案内されるがまま居間の食卓に通され、冬場は掘り炬燵であろう机につかされてしまった。

フカフカの座布団に、他人の家という雰囲気の問題で二重の意味で居心地が悪かった。

「まり姉、帰ってきてすぐで悪いけど。茶を出してやってくれ」

「わっかたよ啓ちゃん」

スキップをするようにお茶を台所に行こうとするまりに舞は手伝おうとする。

「手伝います」

「いいの、座ってて。お客さんだしゆっくりして」

座布団に押し戻される舞は借りてきた猫のように大人しく座っておくしかなかった。

畳の目に指を滑らせ、部屋を見渡した。

電球色のオレンジっぽい色でリラックスする電気、小物入れやリモコン入れ、テレビに据え置き電話など家庭的な温かさを感じさせる内装だった。

壁に掛けられた時計がカチカチと歯車の音を鳴らし、その下には幾つも家族写真が飾られていた。

仲の良さそうな篠原夫妻、その手に囲われたまりが気恥ずかしそうに笑い、啓二はどこ吹く風かそっぽを向いていた。

「お待たせく、喉乾いたでしょう。お茶です」

「あ、ありがとうございます……」

マグカップに注がれたお茶は、ほうじ茶のよで沸かしたてで味は薄かったが匂いは良かった。

舌を火傷しないようにチビチビと飲む姿にまりは、まるで孫娘が来た時の御婆ちゃんのような綻んだ間でこちらを見ていた。

「な、なんですかまりちゃん先輩……」

「なんだか。リスさんを見てるみたいで可愛いなあって」

一応婦女子としての身嗜み、作法は身に着け実践しているが世間一般の可愛いという部類には私は入らない。無愛想、無口、無表情の三无が揃った不届き者だ。

そう言ったか可愛い私は私より、まりちゃん先輩の方がよっぽど形容に値する。

まるで人恋しい子犬といった感じの雰囲気は舞には羨ましかった。ニコニコと人懐っこい笑顔に人当たりのいい性格は誰もが絆されよう。

そんな彼女が私を可愛いというとは、おかしなことを言う人だ。

「啓ちゃんとのタッグはどう?」

藪から棒にまりは舞と啓二のタッグの相性を聞いてきた。

少しだけ考え答える。

「啓二とのですか……中学初めからの縁ですし、不可もなくいいパートナーだと思いますよ」

「そっかー、良かったー」

「どうしてそんな事を?」

聞き返した私にまりはニコニコとした表情で答えた。

「啓ちゃんがね最近私に相談してくるの、『七瀬とどう接すればいいんだー』って。啓ちゃんとクラス別でしょ、話題も合わないからコ

ミニニケーションに悩んでみたいだよ?」

驚きだ。私と同じく無神経、無節操、無遠慮の三つ揃った口達者が人間関係に悩むことがあったとは。

暫時、啓二との円滑なコミュニケーションについて熟考した。

任務の話はブリーフィングで話し合うことは当たり前として、他の話題等を私から振ることは基本的にはないと理解している。

日常会話などの話は今日の昼食に話したような軽い話が多い。距離感が近く、共通の趣味から出る話などはあまり話していないかもしれない。

ここ最近で話した話題と言えど何があつただろうか。ふと一つ思い出す。

「そうでしょうか? この間も小説の話をしましたよ」

「小説? どんな?」

「藤沢周平の『隠し剣 秋風抄』というモノの話をしましたよ。第一章の弓削甚六の使う石割りという技は再現できるって言っていました。四章の『陽狂剣かげろう』の陽狂剣かげろうの主人公、佐橋半之丞が狂気に染まっていく様は冷たくて皮肉的だと言ってます」

そう語る私はつい書籍の話に熱が籠ってしまう。

ハツと気づきちらりと見たまりはの表情はにこりと笑い、安心した様だった。

「良かった。啓ちゃんと舞ちゃんが不仲になったんじゃないかって心配しちゃった」

「……私が口下手なのがいけないんです。もう少し気軽に話せる話題を持っていけばいいのですが」

「そうかな? 啓ちゃんは元々本は読むほうだったし雑食だから何でも読んでるよ」

「そうなんですか?」

「うん。舞ちゃんとペアを組んでからさらに加速したかな。漫画と小説が特に多いけど、最近とか『人類不平等起源論』とか偉人の伝記とか、さすがに新約聖書を読みだしたときは変な宗教にハマったかもって心配しちゃったけど」

さすがに驚いてしまう。啓二がそこまで本を読む人間だとは思って見なかった。

宿題を見せてくれと言ってくるあたりいつも遊び惚けて、学業をすっぱかしているものだとばかり考えていた。

一般的な勉学は別として、存外啓二は博学なのかもしれない。

啓二を心配するまでもないのに、まりちゃん先輩は本当にやさしい。

「まりちゃん先輩は、家族思いなんですね」

「そうかな、普通だと思うけど」

「いいえ、家族思いです。家族の心配事に真摯に向きあって一緒に解決していく……私の家族は違いました」

まりは少し考えた様子を見せ、笑顔で答える。

「家族次第だと思うよ」

その答えに、私はきよんととしてしまう。

私の家庭環境はお世辞とも言えど決していいとはいなかった。

幼い頃から紙力の力を授かり、紙に自在に操れた私に周囲の人間は気味悪がり、両親ですら怪物を見るような目で私を見ていた。

厄介払いで私を五車に送った両親は私を心配はしてくれないだろう。

学生寮に入っている人間は大体が私のような人間が多く、ネグレクトされた者たちの巣窟であり、その事はこの街では周知の事実だった。

家庭を知らず、人の笑い声を知らず、人の温もりを知らぬ抜け殻。

憐れむ人間は数多くいれど、まりのように澆漑と、家族次第だと切って捨てた言葉にある意味ですつとした気持ち私に心内に芽生える。

ふいに頬がほころんだ。

「そういった事を言われたのは初めてです。そういった答えもあるのですね」

「？ 答え、初めて？」

まりはよく理解していないようだったが、私はその反応は新鮮で楽

しくなった。

「おまつとさん！ 俺特製男飯、追い生クリームのカロリー爆弾クリームシチューだ！」

納得の出来前なのか渾身のドヤ顔で、台所から現れる啓二。どう名付ければ美味さを二割増しで削ぐ名前を付けるのか。

両手一杯に鍋を持ち、机にドカツとクリームシチューを置く啓二の姿は今までに想像もしていなかったエプロン姿に新たな側面を見たと思う。

テフロン加工の鍋の蓋を開けると、フワツと軽やかな煙が薄い霧雲のように立ち上った。

「わぁ……」

思わず小さな声が漏れてしまった。

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、グリーンピース。色とりどりの野菜たちが目を楽しませた。

シチューの甘く滑らかな香りに混在する胡椒など香辛料の香りが食欲を誘う。

「七瀬は白米に掛けて食うタイプか？ 一応飯も炊けてるから食べたくなったら言ってくれ」

丸深皿にシチューをよそいながら、そう言う啓二の姿は手慣れた感じがある。今日は啓二のいろいろな側面を見る機会が多いように思う。

そういった雰囲気はなかったが、家事が得意なのだろうか。家事に勤しむ啓二の姿を想像する。

専業主夫というのはこう言った感じなのだろうか。仕事終わりに温かく出迎えてくれ、ともに家庭を育む。

不意に啓二と私がいもしいない子供を挟んで笑って歩く想像をして、ポツと頬が赤くなる。

「どうした七瀬？ 顔が赤いぞ、クーラーつけるか？」

一人勝手な妄想に顔を赤くしていた舞に心配するように聴いてくる啓二。

盛り付け終わったシチューは舞の前にあり、ボーとしていたよう

だった。

「い、いえ。何でもありません。——いただきます」

「? おう?」

匙を持ち、シチューを掬い口に運ぶ。

私は一人で食事をするときは基本的に本を片手に読みながら食事をすることが多い。

行儀は些か悪いが、一人であるために気にはしていない。

食事は作業、味気のないパン食などがメインだがそれと同じ心持で味わうと。

「……おいしい」

想像以上の美味しさに言葉が出る。追い生クリームカロリー爆弾と女性受けはよろしくネーミングだが、ピリリとした胡椒の風味を和らげるクリームソースの味が鼻孔を抜ける。

甘く、そして脂のどっしりとした重みのある味。味は確かでした。りとした味わいのだが、その味は舌の奥に余韻を残し尚且つその余韻はくどく無くスッキリとした味わいだった。

「そいつは良かった、旨くなかったら食っても楽しくないからな」  
白米をついっだ丼にシチューを掛け、口に掻っ込む啓二はそう思った。

確かにシチューは美味しいが、その食べた方はどうなのだろうか……。

そうであったとしても、この食事は楽しかった。誰かと囲む食事がこんなに食事を美味しくさせるとは実感したことがなかった。

本に記された、食事の楽しさを初めて知り私は頬を綻ばせ笑った。

鳴き声も細く数少なくなった鈴虫の鈴の音、夜道に七瀬を学生寮まで送るまで付き添う啓二は肌寒くなった夜風に体が冷える。

しかし啓二の体温は想像以上に熱く火照っている。

「……………」

思い人を隣に嬉しさに盆踊りを三日三晩踊れそうな歓喜に支配さ

れているにも拘らず、その無口さに妙な焦燥感に苛まれていた。

まり姉をダシに使い、やつとこさ彼女と二人つきりで話せる機会に巡り合えたのにこの様とは。

(なっさけねえ！)

恥ずかしさで、カナダ映画のスキャナーズの名シーンの頭が炸裂しそうなほどに顔が熱い。

(流石にないな。怖すぎだ……)

変な想像に一人突っ込みを入れ俺は鼻笑いを漏らした。

その息遣いが聞こえたのか、舞は僅かに顔を傾け聞いてくる。

「どうしたんですか？」

「いや、コバエが鼻を掠めただけだ」

俺は頬を掻き誤魔化した、七瀬と一緒にいるから緊張しているなんて当て擦りのような言い訳を言うほど、女々しくもプライドを捨てて  
いるわけでもない。

好きな女の前では格好を付けたいだけだ。

「あなたがあんなに料理が上手だったなんて驚きです」

「そうか？ 親父たちは、任務が多いしまり姉は委員会で忙しいだろ。必然的に俺が家事をやるんだよ」

「……ふーん」

納得したのか納得してないのかよくわからない返答が返ってくる。家庭を経験した事がないのは知っていたが、ここまで知らないというのも驚きだった。

食事中の七瀬は、七瀬自身気づいていなかったが。目を輝かせ、そして泣きそうな目をしていた事を。

その感情が悲しさから嬉しさからか、どちらとも見当がつかない啓二には彼女に寄り添おうとずっと前から決めていたのだ。

彼女に初めて会って、彼女に惚れた中学一年の入学式のあの瞬間から。

七瀬は思い返す様に瞳を閉じ、微かに微笑む。

「今日は楽しかったです。ありがとうございます」

「いいってことよ。相棒だしな、お前が不調じや心配で戦えねえ」

「ふふっ、心配性なんですね」

くると振り返り、その満面の笑顔を俺に向ける。

暗闇も何のものか。純白の色に光り咲く笑顔に、思わず俺も笑顔が漏れた。

そして思った。

(可愛すぎだろ。卑怯すぎる……ッ！)

スケベ心満点で恥じ入る気持ちだが、可愛いと思ったのは嘘ではなく本心からそう思えた。

住宅地を抜け、学園付近の学生寮の近くに来た時、不意に鼻を掠める香り。頬にぽつぽつと打ち付ける雨粒。

七瀬は天を仰ぎながら思い出したように言う。

「明日は雨天祭でしか?」

「ああ、朝から土砂降りになるから傘か合羽がいるな」

頭を掻きながら憂鬱な気分になりそうになる。明日はやる事が山積みで、学園には行けないな……。

町の人間には隠されているが、何しろ今年の雨天祭の主賓は『俺』だ。

「啓二、明日の夜、時間ありますか?」

「ん? どうか。予定が立て込んでるが会うくらいなら出来るはずだが」

七瀬は少しモジモジした様子で俯き気味に言う。

「今日の料理はホントに美味しかったです。……お礼がしたくて、

明日の雨天祭——一緒に回リませんかツ!!」

最後は叫び声のような音量で聴いてくる七瀬。学生寮からは何事かと窓から生徒が覗いてきて、恥ずかしさから頬を紅潮させ俯く。

「——」

明日、雨天祭、一緒に回る——デートではなからうか……。

「マジ?」

「駄目ですか?」

七瀬は残念そうに聞いてくるが、答えは迷いながらもほとんど一択であった。

「俺なんかで良ければ、ご一緒させてください」

## 雨天の祭

土砂降り雨に先生の声もろくすっぽ聞こえない。

皆、放課後の雨天祭にそわそわとしている中で一人、憂鬱な気分の蛇子。

窓際に二席並んで誰も座ってない席を眺めた。その席は啓二と、そしてふうまの席だった。

クラスの不真面目どころの二人がいないと、このクラスが唐突に火の消えた蠟燭のように物悲しく、退屈に感じられた。

(啓二ちゃん、いつもこの時期一回休むんだよね……)

授業は不真面目で興味のない科目は寝るか、ふうまと雑談するからあつた啓二だがこの一回を除けば無遅刻無欠席の皆勤賞であるはずだった。

しかし啓二は毎年、この時期に一度だけ休み、行方知れずになる。話を聞けば家の用事とはぐらかし、けらけらと笑うばかりで取り止めがない。

(毎年何してるんだろう……)

上の空で窓を望む蛇子の脳天に紫の拳骨が降ったのはこの二秒後だった。

軒先でごろ寝を決め込み、うるさいぐらいまで降る雨音に耳を傾けながら、庭先の鹿威しを眺める啓二の表情は弛緩していた。

早朝に担任の紫先生に連絡を入れ、家を出た俺は五車町北部の山に建てられた寺の離れでくつろいでいた。実家の行事、雨天祭の準備に来たはいいものの宗家の人間に働かせては悪いと分家の人間たちが世話もなく走り回り、沙流さるとび鳶屋敷に続く山道は騒がしく人で溢れかえっていた。

暇を持て余し、親戚一同に挨拶回りをしていたら又従姉弟にあたるのか、血統的にあやふやな従姉の泉睡蓮に、『みんな委縮するから離れで大人しくしてなさい!』と怒られふて寝を決め込んでいた。

「屋台から型抜きをガめて早々に全て終わらせ、寝っ転がりながらボリボリと型抜きクスを食べていた。」

「暇そうね」

「ん〜？」

「そう声を掛けてきたのは俺と同じく雨天祭の為に学校を休んでいくクラスメイト、磯咲伊紀だった。」

「くるっと寝返りを打てば、離れには続々と同い年もしくは近い年の連中が集まっていた。」

「よくあるやつだ。親戚の集まりで親の話についていけず子供同士を同じ部屋に押し込むのと同じ感じの。要は厄介払いだ。」

「おめえ休んだのか？ 見慣れて面白くねえ面だな」

「言ったわね。私の忍法が水遁ってしていつてるの」

「親に怒られるぞ、ぶっ放したら」

「……ホント、小賢しいわね」

「妹と遊んどけよ。俺は精神統一したいんだ」

「疑わしそうな目で伊紀は俺を見ていたが、精神統一というのは本心だった。」

「襲名披露まで分家の伊紀や睡蓮など俺のがどのような立場なのかは一切知らされていない。宗家筋に近い人間程度の認識だ。」

「その為、襲名披露では当主足りえるためそれに能う態度を示さねばならないのだ。」

「襲名の言葉、当主足りえる態度、親父たちのそれを思い出すが――。」

「参考になんねえなあ……」

「里親である篠原家の義父殿は人としては大変器がデカく懐の大きい人間だが、豪快で俺よりもがさつだ。」

「宗家の血縁の親父はまず数回しか会ったことがないため参考資料にはならない。」

「結果として言うのならばどうしようもないのだが、こればかりは俺の人生の岐路に立っているのだ。キッチリこなさなければ示しがつかないだろう。」

「そろそろ、山道入り行くぞー、準備しろー！」

名前も知らないような六等親以上先の兄さんたちの呼び声で、ぞろぞろと真つ黒な生地に沙流さるとび鳶家の家紋、『鵜鳥柎』の紋が刺繍された雨合羽を着て外に出ていた。

「篠原、そろそろ山道入りに行くわよ」

伊紀は俺にそう言うが、俺は頑としてその場を動かず適当に返事を言っただけで誤魔化した。

「もうすぐ学校終わりだし、まり姉に合羽渡さにやららん」

「毎年そうね……ちゃんと山道入りに入りなさいよ」

「はいはい」

離れに異様な静けさが訪れ、雨音だけがうるさく響いていた。

皆が山道入りに向かい、あれだけ騒がしかった屋敷に続く山道も静まり返りっており、雨に誰もかれもが注ぎ落された様だった。

俺の息遣いだけが静かに響く中に、俺とは別の音が混じっている。摺り足を立て、部屋を仕切る戸の外で足音が留まった。

「——啓二様、ぐ支度を」

「……ああ」

起き上がり、背伸びをし静寂の中で緊張を解きほぐす。

戸はスーと開き、出迎えのりゆうこしゅう琉子衆棟梁の一人、鳶海蛇乃が平伏し廊下で待っていた。

敬いとは縁遠いと昔は思っていたが、責任は否応なしに押し掛かってくる。

離れの突き当りの奥部屋に足を進めた。

奥部屋に向かう途中の廊下には拳大の石が真ん中にポツンと置かれ、石を挟んだ向こうにはりゆうこしゅう琉子衆棟梁の流川野猿がいた。

露帝より流れ込む魔族から、蝦夷地防衛監視のため対魔忍界限で最も結界術に精通した家系の人間で『廊下に置かれた石』も立派な結界の一つだ。

スツと首を垂れ、結界石を解く。

「お久しぶりでございませう。啓二様」

「——ご苦労」

一言だけ言葉を返し、俺は奥部屋の襖を開けた。

奥部屋には特にといって家具という家具は置かれておらず、たった三つ。

竹で編まれた置型照明と姿見、黄と黒の陣羽織の掛った衣紋棹があった。

洋服に陣羽織は合わないと思い、今日は作務衣の上から男用の小紋を羽織っている。

手に取り陣羽織を羽織る。

妙な臭いがこれに染みついていることに気づき、鼻を近づけ嗅ぐ。

「……血の匂い？」

妙だった。毎年雨天祭は琉子衆が警備にあたるために五車周辺は騒ぎがないはずだ。

気にしても仕方がない。姿見で、姿を確認し部屋を出る。

「啓二様、こちらでございませう」

蛇乃と野猿が玄関まで誘導してくれた。靴で溢れかえっていた玄関は伽藍としており、外には真っ黒い和傘をさした虎ジイがいた。

靴を穿き、虎ジイの前に立った。

「虎二、ご苦労」

「ご立派になりました。啓二殿」

か細く弱弱しい声であったが珍しく虎ジイの声がはつきりと聞き取れた。

頭を深々と下げた虎ジイは白衣の懐から古皺尉の能面を差し出し、てくる。

杉の木で新しく作られた俺の面だった。山道入りする次代当主は歴代当主の羽織ってきた陣羽織を着て顔を隠すことが習わしだ。

俺はそれを受け取り被る。

蛇乃、野猿が黒の和傘をさし俺が濡れぬように空を覆った。

「皆、行くぞ。山道入りだ」

——『山道入り』。

雨天祭、沙流鳶家伝統の襲名披露の一つだった行事の一つ。

本来は関西の沙流鳶家由来の土地で行われた分家衆による百人参りだった行事だが、沙流鳶宗家が五車に移動しほぼ形骸化した行事の一つだ。

道のりは沙流鳶屋敷表山道より始まり、五車町を西に亘り、学園のある一丁目を抜け、住宅地の多い二丁目に向かい、沙流鳶屋敷裏山道を一周してくると言うものだ。

本来の分家当主百人の宗家参拝の目的は既に失われ、分家代理の次男坊次女や次期当主などが五車を練り歩く形だけのものだ。

形だけを守り、本来の目的を失ってつ本末転倒だが形に縛られる日本人はこうして今も本来の形を失った行事——山道入りを行っている。

土砂降りの雨の中、最後尾より少し離れた位置から啓二たちは山道入りをしていた。

毎年、山道入りはハロウィーンのそれに似た狂騒めいたお祭り行事の一つだったが、今回だけは違っていた。

最前列は騒がしく、まだ若く潤しい見習い対魔忍たちが軒先の店で食い物を買いどんちゃん騒ぎをしているのにも拘らず、最後尾の啓二たちには五車の住人は深々と頭を下げ、頑なに目を合わせることを避けていた。

沙流鳶当主の宿命であり、現当主、沙流鳶利家の逸話から沙流鳶家の当主は一部からは神格化されているといつていい扱いを受けていた。

——北東の地『タカマガハラ』にて沙流鳶利家は人の理より外れた。魔と交わった対魔忍の家系は人という形を保ちながら、僅かながら人の道を外れている。

血を辿れば先祖には魔がいると知ってはいるが、人である矜持は捨てていないのだ。

人の誇りを捨てず、人の法に倣い、影より人を助けるべし——それが対魔忍であるはずだった。

しかし親父はその矜持をかなぐり捨てた、何らかの理由があつたのは理解できる。

逸話は的を射ている。

俺の親父、篠原、いや——沙流鳶啓二の父親は既に人間ではない。

二丁目を抜け裏山道へ続く道に入る。

グスグスと鼻を鳴らす忍熊や、チロチロと舌をのぞかせる忍蛇たちが野山を闊歩している姿が見て取れ、いくら手懐けられた獣たちと言えどこの土地はすでに人の土地で無いことが理解できた。

裏山道の切り開かれた道のりは家屋の連なる風景より静寂の言葉がよく似合う風情があつた。

あれだけ強く降りしきる雨も木々の遮りがあり、雨粒は霧のように小さく頬を撫で、しつとりとした空気があたりを包んでいた。

山道入りの最前の喧騒も、どこか遠く、草木の騒めきの方がうるさく思えるくらいだった。

山に囲まれた五車の町には川が通い、その川は町の途中で二又に別れている。

その源流の付近に建てられた石製の橋は、苔が生い茂り踏みしめれば水がじわつと溢れ出てきた。

黄泉比良坂を歩んだイザナギもこのような心境だったのっだろうか。

決別を定められたにもかかわらず、イザナミに一目会い、ともにその体が朽ちようと共に居たいと思うのは間違っているのだろうか。

(国神の愛は不細工かどうかの有無だからな)

人の見た目ではない親父殿イザナミに俺が見舞うことイザナギが適う時だった。

薄ぼんやりと木々の切れ間より光が差し、次第に光源が見えてきた。

石灯籠が列をなし、裏山道を照らし上げていた。続く先に沙流鳶屋敷の扉があり、灯籠は門を差し占めていた。

門の前には喪服にも似た和服を着た、女性が立っていた。

目を凝らしその顔を見て誰であるかを理解する。丁寧に山道入りする者たちを迎え入れ、俺を見つけて柔らかな笑顔で声を掛けてく

る。

「啓二さん。おかえりなさい」

「美弥さん。ただいま戻りました」

その口調はまるで少女のように無邪気で、そしてそれに反したように容姿は大人びて俺でもドキツとしてしまっうほど綺麗な女性。

俺がその胎<sup>なか</sup>で育んでくれた人、母親の沙流鳶美弥だ。

「お母さんって呼んで、母親なんだから」

「固い場なので、そう言った事は」

「ふうん」

残念そうに口を尖らせる母親に俺は少しだけ笑って見せた。

どうしてか、俺はこの人を母親と呼ぶのに抵抗があった。

この人を見ても母と認識できず、俺の中では母親は篠原の家のお袋だけが『母親』だった。

養子に出された弊害だろう。そのおかげでこうした場面で変に態度を崩さずに済む。

「さあ、上がって。利家さんが待ってるわ」

母屋に誘い、ごった返す敷地を抜けていく。

宗家衆だけでも百名を超え、分家衆も合わせれば五百名を超えるのではなからうか。

琉子衆も合わせれば千人を超えるだろう。

家系の数はかなり減ったとは言われているが、沙流鳶血統の人間は今この対魔忍界限で最も勢力が多く、江戸前期にはかのふうま家とやり合ったとも伝えられているくらいだ。

ふうま弾正の反乱以降、対魔忍の勢いは失せて内調なる政府組織が対魔国防権を主張しだす始末だ。

この国の雲行きは雨雲に覆い隠され、一寸先は奈落にすらなりえる。

ふうま家は失墜し、甲河家は滅亡した。

対魔の家系で名家と声を大にして言えるのは、現在は井河家と沙流鳶家の二家だけとなり、この国の世情はすでに危うかった。そしてその危うきを加速させているのは何を隠そう沙流鳶家だ。

最も排他的かつ、最も保守的な立場を貫き今も表立って政府への支援はしていない。

たった一度だけ政府に力を貸し、今は独自の暗殺活動で対魔族への対応をしている。

「襲名おめでとうございます。御当主様」

「御当主殿、今日は誠におめでとうございます」

「おめでとうございます、当主殿」

誰も俺の名前を呼ぶことはない。

当然だ。知らないのだから。

今日の襲名披露では次期当主、俺の名前は明かさねず、明日の奥宮へ行くときだけ、分家衆に俺の名前と戒名が告げられる。

大座敷と続く廊下で深々と頭を下げる分家当主たちに軽いジエスチャーで応じ、座敷の前に立つ。

「利家殿、御当主様が参られました」

虎ジイが襖の前で深々と頭を下げそう言った後、戸の向こうより声が返ってきた。

「待ったぞ、入れ」

蛇乃と野猿が戸を静かに開き、大座敷の全貌が見えた。

豪華絢爛な飯が膳の上に所狭しと敷き詰められ、炯々と輝く奥襖の模様はかの最悪をもたらす大魔族『鵄』が踊るように描かれていた。

上座の席に膳が二つ並び、その一つがすでに埋まっていた。

黒と金の毛色が生え毛並みのいい大猿、狒々が座してこちらを覗いていた。

「よく来た息子殿。俺の隣にはよ座れ」

上座に座る俺と同じ陣羽織を羽織った大狒々が人語を話した。

これが俺の親父、沙流鳶利家の姿だった。

北東のタカマガハラで人の体を捨て、心転移にて神霊となった狒々の肉体を手に入れたのだ。

「……………」

俺は親父殿に深々と首を垂れて静かに静かにその横に座った。

それ御合図に分家衆の当主たちは自分たちの膳の前に座り神妙な

顔で目を伏せた。

狒々はそれを見渡し、御神酒を注いだ盃を掲げた。  
「今宵は縁日ぞ。皆騒ぎ、悦び、喰らおうぞ」

## 家族の血

「おねーちゃん、はやくーっ！」

井河邸の玄関先で大声で妹に急かされるアサギは、化粧台の前で薄く紅を口に引いていた。

さくらは自分がどう見られるかとは考えていない様だが、アサギは表に出るときは少しでも美しく見られようと飾る年頃に昇ってしまった。

子を儲け、家庭に入ってもいい頃合だが立場それを許さなかった。いつも気を張り詰め、息が詰まりそうになる。

そんな仕事一辺倒のアサギに気を回してか、それともただ自分が楽しむためか、雨天祭の出店を回って息抜きをしようと駄々を捏ねた。「もうすぐ行くわー」

書類棚より二通の封筒を出し、差出人を確認する。

——衣原 敏井江

私はまだまだ世間を知らない学生だった頃に知り合った友人からの便りだった。

内容は息子が雨天祭の日、家督を継ぐため後見人となってほしいという内容であった。

衣原というのは養子に出された時の幼名であり、その家名と本名はすでに知っている。知っている為に後見人は丁重に断った。

後に届いた便りには、なら共に我が子の晴れ姿だけでも祝い一献酌み交わそうという旨が記された内容が、今日の夕方に届いたのだ。

さくらは祭に行きたいと駄々を捏ねだしていたためちよいどいい機会だった

セカンドバッグに財布とスマホ、その封筒を入れた時、インターフォンが鳴り響いた。

「はーいっー」

限界に待機しているさくらがすぐに出て対応する。

自室より出て玄関に向かう。

「やへっ、どちっやまっ。」

腕時計を嵌め、顔を玄関に向けた時、まさに招かれざる客という言葉が合う人物がいた。

「アサギ、急ぎ人員を集めたい。時間をもらうぞ」

内務省公共安全庁対魔災三次対策室『調査第三部』セクションスリー部長、山本信繁だった。

「利家殿、飲んでくださいよーっ！」

野猿は顔を真っ赤にして親父殿の盃に酒を注ぎ呆けた顔で大声で笑っていた。

静粛な席も時間とともに緩和する。宴会も数刻たち、どんちゃん騒ぎの狂乱になりつつある風景に俺は少し気を抜いていた。

分家衆の当主たちは思い思いに祝いの言葉を俺に言い席を立ち、次第に大声での笑い声が木霊する藪々としたものに代わり俺は妙に緊張していたことが馬鹿らしくなり始めた。

隣に座る狒々、沙流鳶利家の元より赤らんだ顔を酒でさらに赤くし顔をほころばせていた。

「親父殿。面取っていいか？」

「もう少し待て、そろそろお開きだ」

面を少しだけ上げ少し乾燥し始めた刺身の盛り合わせを食べたため息を付いた。

あれだけ強く降りっていた雨は、小雨になりしとと庭先の木々に露を乗せるだけであった。

表山道の方より縁日の声が聞こえる。

(抜け出せるか……待たせてねえといいけどな……)

七瀬との雨天祭を巡る約束に焼きもきした心境で、次々と酒を注ぐうとしてくる野猿を虎ジイに押し付ける。

「コラーッ！ 何パンーになっとなんじゃーッ！」

蛇乃が呂律の回らぬ怒声を上げ、周囲から歓声が上がる。見れば大の大人が裸踊りまではじめ、皆がいい具合に壊れ始めた。

しばらく見ない親戚一同の面々の壊れた姿に俺は苦笑し、お茶を飲

んだ。

いくら酒が美味しかろうとあかも壊れては頂けなからう。未成年でもあるため終始ソフトドリンクで喉を潤わしていた。

「皆いい頃合、宴会はこれで閉幕だ。酒はまだまだある、親戚筋とはその顔を合わせる機会もないだろう、親睦も程々にせよ」

親父殿はそう言い立ち上がった。立つたといつても大猿の背丈、座った俺の同じくらいにしかならなかった。

俺の隣で小さく耳打ちする。

「暇だろう。屋根に行こう、親子水入らず一献」

「分かった」

共に席を立ち、大座敷を出た。

どんちゃん騒ぎは俺たちが抜けても座敷で続き、宴会に出席していない分家衆の親類は屋敷のそこかしこで騒ぎあげていた。

あちこちで給仕に駆け回る御手伝い達に頭が下がる思いだ。

屋敷を抜け台所に向かい日本酒を一升と盃を二杯貰い、蔵の方へ向かった。

「酔ってはいないな?」

親父殿は木々をひよいひよいと駆け上り、屋根から手招きする。

相当飲んでいるのに猿の健脚は失われてない様だ。俺も地面を蹴り上げ、一跳びで屋根へと上る。

「おお、素晴らしき脚力よ。俺も若い頃は同じかそれ以上跳べたがなあ」

「親父殿は元より狒々だろ」

「こいつめ言いよるわ」

からからと笑う親父は濡れた瓦の雫を払い座り、隣に座るよう促してきた。

息苦しい面を外し俺も座り寝転がる。どうせ濡れるのは陣羽織だ、どうとでもなればいい。

「それはお前の子も使うぞ?」

「どうでもいい」

「無礼な奴だな。先祖代々使った陣羽織を」

「俺と同じ血が半分は言ってるなら。無礼もくそも考えてないだろ」  
「まったくだ」

キキキつと猿笑いをだし、日本酒の瓶を開ける。

「飲もう。啓二」

「俺未成年だぜ？」

「法に囚われては何も成せぬ。倫を尊び、法は軽視しろ」

「親には思えねえ言い草だな……」

「昭和では誰もが酒を飲み、煙草を吸っておったがなあ。しづく絞りのいい日本酒だが、お前が飲まんというのならそれも仕方ない」

親父殿は酒を乾かし、キーつと猿声を上げ夢見心地と言った様子だった。

不思議だった。こうして一対一で話した機会はよくよく考えればなかったかもしれない。

いつも会ったとしても、というより過去の親父はまだ『人間』だった気がする。

択捉での要請任務に向かって以降、親父殿は親戚の前を表すのは雨天祭ぐらいだった。

やはり狒々となったことを恥じているのかもしれない。

そう考えを巡らせてみるが、人の心というのはやはり分からないものだ。

「そろそろ来る頃か……」

親父殿はそう言うのと、屋敷の塀を飛び越えより木々を伝い一人の男が蔵に上って来た。

「よっ、啓二、親父久しぶり」

「安芸耶ッ！」

唐突に現れたのは啓二の実兄、沙流鳶さるとび 安芸耶あきやその人だった。

スーツ姿で片手にビジネスバックを持った姿に顎が外れるほど驚いてしまう。

親父殿は手招きし座るように促した。

安芸耶は二年前に理由もなしに唐突に出奔し、沙流鳶家筋で勘当状が出回るまでになった伝説の問題児だった。理由は様々流れ、最も主

流だったのが俺が家督を継ぐことになったことに反発したというのが囁かれている。

「安芸耶、市中の生活はどうだ？」

「平和極まるね、出奔して正解」

盃を受け取りグイッと呑み旨そうな唸り声を上げる。

お化けでも見たように安芸耶を見続ける俺の姿に実兄は不思議そうにし、親父殿に訊く。

「親父、言ってねえの？」

「機会がなくてな、ほたつておつた」

「おいー、おっおっおーい」

軽いノリで親父殿の肩を叩く安芸耶は明るい顔をしていた。

親父殿は綻んだ顔で俺に安芸耶の事情を打ち明けてくれた。

「話しておらなんだな。安芸耶な、市中で嫁をとつたのだ」

「はあ!？」

いたずらが成功したと言わんばかりに二人は猿笑いを上げる。

「啓二が驚くのは当たり前だ。」

対魔忍が一般人と縁組をするというのは容易なことではない。

異形の力を持った人間が只人と結ばれるということはそれだけで障害になり、対魔忍の家系からは邪魔立てが間違いなく入るし、何より国が戸籍の変更を許さない。

その障害があるのに――。

「できちゃった婚でーす。ぴーすぴーす」

嬉しそうに薬指の結婚指輪を見せつける安芸耶にちよつと腹が立つ。

「安芸耶はな、市中の女子と内密に子を儲けたと俺に告げた。子が出て市もうたから仕方がなく出奔したことにしたのだ。勘当状を回せばこいつはもう沙流鳶の人間ではない」

そう言い親父はクイッと二杯目の日本酒を飲み干し、ゲツプを一つはいた。

「そうならそうと言えやクソ親父!」

「そう言うな啓二、親父も悩んだ末の答えだったんだ」

「うるっせえ主要原因！俺の取り越し苦労返せ！」

喚き散らす俺に安芸耶も親父殿もにやけて終わるだけでどうしようもなかった。

俺は不貞腐れるように口を尖らして茹蛸のように膨れてた。

そんな俺に、安芸耶は慰めるように俺の肩を叩き、頭を撫でてくる。

「悪かったな心配かけて。遅くなったけど襲名おめでとうな」

「そういう祝い事はもっと早くに言っただけほしいもんだ」

初めて親父殿の親らしいところを見た気がした。養子に出され、親子の関係なんて仮初のモノしか知らない。そんな俺にも親父殿は親になるうと必死に親らしくおろうとしてくれていた。

「早く孫がこの手に抱きたいのう。啓二、この機に嫁を探さんか？」

「はあ？ 嫁をさがすつてどこで」

「雨天祭の目的を忘れておらんだろう。次期当主の襲名と、沙流鳶の血を絶やさぬための見合いの場だ」

親父殿は懐から嫁の候補となりえる名が記された一覧を出す。

見知った名前もいくつがある。当たり前だ、何せその一覧にある名前は五車学園の生徒から選抜された秀でて強い者たちだった。

「強き嫁がいいだろう。秋山家の凜子という娘はどうだ、気立てもいいし乳もデカイ。夜は不便せんだろう」

「いやいや、ダチの姉貴に手出せるかよ」

「そうか、ならば鬼崎の所の娘はどうだ。血の強さは折り紙付きだ、俺たちも大手を振って迎え入れよう」

親父は次々と候補を上げ、早く嫁をとれと急かしてくる。

見た目も麗しく、血筋も申し分ない者たち。おそらく彼女たちの了承は得ていないだろう。

しかしながら現在の対魔家系の序列に措いて最も古参でかつ最大規模の沙流鳶の申し入れを断るといふ発想がまずあるだろうか。

対魔族との戦いに措いて血の強さは特に重要になる要素だ。

魔族と対するその戦闘技術、潜在的超常の力の素養。すべて血によつて決まる。

そういつた事から対魔忍の縁組は重要な事であり安芸耶のように

一般女性と子を儲けるなど言語道断であり、対魔忍は対魔忍の花嫁花婿を娶ることが常だ。

それ故により強き子を残すため血の強い家系に分家や他の家系は弱く、封建的な形になっている。

「どれも粒ぞろいだ。この者すべてを嫁に迎えてもいい」

「日本は一夫多妻制じゃねえよ。だからご先祖様は関西の隠れ里に追いやられたんだろ」

沙流鳶家の忌まわしい過去だ。

より強き血を生み出すため度重なる人の品種改良を行い、血の強き子を当主と据えてきた。

その為には強引な方法で嫁を娶ることもあった——近親間での子を儲けることも。

倫理より外れた当主製造は先の大戦の終結とともに政府より禁止令が出るほどに、おぞましい営みがこの家の過去にある。

その名残こそ何を隠そう——雨天祭の全容だ。

「うむ……口惜しい限りよ」

「時代だ親父、嫁は一人で十分だぜ。俺のそこは鬼嫁だ」

安芸耶はそう言い空となった親父殿の盃に酒を注ぎ、口を塞いだ。

俺自身もそう思う、血を分け対魔の血を濃くするだけが男女の関わりではない。

子を育み、寄り添い、夫婦ともにその喜びを噛み締めるべきだ。

そうでなければ子供が不憫で仕方ないだろう。

「今宵も、お前が身を許せる女子を待たせてあるがどうする？」

ビツクリするようなことをさらっと親父殿は言い放った。

嘘ではないはずだ、恐らく分家衆から血の強い子を選んで離れで待たせているのだ。

「いや、余計なお世話だ。俺はまだ純潔を守るぞ」

「そうか……それは残念だ……」

肩を落とし残念がる親父殿を他所に俺は空を見て、雲より漉ける月あかりを見て時刻を囚った。

「安芸兄、今何時かわかるか？」

「ん？ どうした」

「いや、ちよつとな」

安芸耶は不思議がりながらスマホの画面を見せた。

「七時半過ぎだ」

渋い顔を浮かべ唸ってしまふ。

その様子に安芸耶はなにかを察したように、下心が前面に出た顔をした。

「啓二いー、さては女だな」

「なつ、何言ってるんだ」

声が裏返り、動揺したように否定しまった。

それは同意したようなもので安芸耶ははにかみ親父殿と肩を組んだ。

「親父ホントによけな世話だぜ、なんせ啓二はもう女を作ってるみたいだ」

「なんとツ！ それは誠か！」

「だから女じゃねえって、相棒パートナーの子が祭を回らないかって言ったから――」

捲し立てるように迫ってくる肉親たちの気迫はある意味でコワイくらいだった。

「それはデートに誘ってたんだ。変に勘ぐんな気づけ！ こんなもの脱げ！ なんだこの髪、せめてセットしていけ！」

「相棒パートナーと言う事は対魔の血筋か、それは僥倖だ！ 女子の心は難しいからな、俺もフラれた時はひどく傷ついたものだ、失恋ほど痛ましいものはない。これを持てい、小遣いだ！」

あれこれと言われ、陣羽織をむしり取られ、髪にワックスで整えられ、変な教訓を教えられ、五万も小遣いを懐にねじ込まれる。

「なんだお前ら！ 何狙ってやがる！」

「孫！」「姪っ子！」

息を揃えてそういう親父と兄貴の目の血走りようは鬼気迫る勢いだった。

作務衣の襟をしっかりと治され、小洒落た帯を渡された。

「ほら、さっさと行け。彼女を待たせるな」

「彼女じゃねえ！」

小紋に腰帯を結び、蔵の屋根から飛び降り表山道に向かう。

本当にこの馬鹿加減は——俺の血だ。

特殊な家系であつても血の繋がりを感じれる、同じ血が流れる親子であり、家族であること実感する。本当に他人にお節介を焼くことを楽しむ馬鹿な血筋だ。

「ありがとな！ 親父、兄貴！」

## にじり寄る暗雲の報せ

人混みに酔いそうになりながら、表山道の入口で舞は未だに來ない待ち人にため息を付いた。

いつもより丹念に着飾ってみた舞はどこか変なところがないか服を見回す。

かんちゃん先輩に頼んで借りた白菊の浴衣に、巾着を持ち慣れない化粧を薄くして、唇には紅を引いていた。白の和傘に隠された顔は白無垢のように純潔を示しているようであった。

その姿に違和感を覚え息苦しさを感じていたが、他の人間から見たらまさに美少女の言葉が相応しい出で立ちであった。

小雨であろうと秋口の雨の冷たさは肌に少し刺さる。

行きかう人々の密集具合は混雑を極め、繊細によけて通らねば肩がぶつかってしまう。この町で人がこれだけ集まることはそうそうない。

それだけ個々の町の人々にとってはイベントごとは稀少な出来事であり、たまの息抜きにはうってつけな事なのだ。

人との係わりを避け、ひっそりとしていることに慣れている舞にはこの光景は少しだけ心が高鳴った。

未知へと踏み込む緊張か、それとも待ち人への乙女心からか。

彼を待っている時間さえも愛おしく、あつたならばその時間はさらに狂おしい。

「……そんな恋愛、私にできるでしょうか……」

恋とは無縁に生きてきて、初恋を覚えたのは今年の事。とある生徒への、淡い恋だった。

その生徒は女性に囲まれ、知に長け、文学に長け、そして人望に長けていた。

そんな彼との交流に胸の高鳴りを覚えた頃には、とうの人物、里を捨て抜け忍となっていた。

その人物の評価も高く、大問題となり生徒の間では黒い噂も絶えなかった。

彼に賛同し共に旅立った教師や幾人かの生徒は、今では立派なお尋ね者。そんな彼に私はまだ……。

「……」

——恋を覚えた乙女はその味に酔いしれる。

幾度か前に任務で出会った淫魔の言葉が呼び起こされた。

その淫魔の言葉は少なくとも的を掠めている気がしてならなかった。

何せ、彼に向けられていた恋心は今では別の——。

ひとりでにその人物の顔が呼び起こされ、頬が赤く染まるが頭を振って否定した。

これではまるで私がつつかえひつかえ男と交際する阿婆擦れの様ではないか。

実際はそんなことはなく、告げられぬ思いに一人傷つくいじらしい少女のそれであつたが、恋多きことは七瀬舞は許せないのだ。

そう考え秘める思いを押さえつけるが、押さえなければ押さえつけるほど感情は良く跳ねるゴム毬と同じで普通よりもより跳ね上がる。

恋に焦がれ、人恋しさに一人でいる時ほどそれは強く感じた。

恋は患い——まさにこの事ではなかるうか。

「遅いですね……啓二」

眩きは喧騒にかき消され、より寂しさが深まりそうになった。

「悪いッ！ 遅れた！」

木々を駆け抜けて来たのか山から登場したパートナーである篠原啓二は僅かに息が上がっていた。

「待ち合わせ場所をしっかりと決めとくべきだったな。寮に行つたけど、もう出たつていうから」

うっかりしていた、誘つたわいもの落ち合う場所を告げずに来たために啓二は息せき切らしてここまで走ってきたようだ。いつもなら寮からここぐらいまでの距離は一息で走りきる啓二の息の上がつた姿は少し新鮮だった。

「ごめんなさい、私の配慮ミスです」

「いやいいさ、七瀬は白いからな。すぐ見つかった」

ニツと笑つて見せた啓二に、くすつと笑いが漏れてしまう。

この髪は私の人生から見ればいわば呪詛のようなものだった。生まれてから対魔粒子の影響で色素が髪に定着しなかった。虐げられてきた象徴であり、忌み嫌う印だった。

だが今回初めてこの髪が、この白さが役に立ったのだ。

息せき切らした啓二の服は祭用に誂えたのか、着流した黒の菊柄の小紋に紺と白の腰帯をしていた。

妙に洋服を着るよりも似合っているように感じる。

いつも見ない私服のせいか妙に彼を意識してしまいそうだった。

「行くうぜ。舞」

「は、はい」

表参道の階段は人の行きかいでごった返しており皆表情が明るい。

祭の浮つく雰囲気はこの町では早々味わえることではない、イベントごとは基本的に年間通して二回、雨天祭と五車祭のだけだ。

隣の祭にわざわざ出向く者もいるくらいこの町に大きな流動的行動はない。

この町に根付く人々がその生業を『命のやり取り』としていようとも、その魂は人であり楽しみを望んでいる。

ひどく不釣り合いで、怪物がまるで人のまねごとをしているようで奇妙な感覚も覚えなくもない。この町の住人の八割は一度は死を目にして、それでもなおその人生を良きものにしようと生きている。

啓二も、私も。

階段を登り切った表参道は光に満ちていた。

屋台が軒を連ね、ライトが道を照らし上げていた。人々の笑い声に様々な匂いが混じった空気に心が高鳴った。

タコ焼きに、綿飴、金魚すくいに、射的。縁日には定番の出店から、出張薬草店や、本物の刀剣を取り扱う店まで普通では見ない店まである。

生業が生業なだけにこうした店にはそこそこ人が入っていた。

物珍しさに見回していた私に啓二は肩を叩いて聞いてくる。

「夜食べたか？ 食ってないならなんか奢ってやるよ」

喧騒にかき消されそうな声を僅かに張っている。

私は首を振っている。

「食べてはいませんがお金は自分で払います」

「いやいや、出さしてくれよ。小遣いもらって俺は今羽振りがいいぞ」  
「そうであっても、自分の分は自分で出します」

何とも言えない顔で固まってしまふ啓二をよそ目に私は近くのチーズボールを打っている店で、一パック買い代金を払った。

「なんともなあ、しっかりしてるけど。奢り甲斐がねえな」

「女だから奢られるというのはおかしいと思います」

「しっかりてること。俺もなんか買ってくるわ」

そう言つて出店に走つて、戻つてきた啓二の手には大盛りのソバめしと山賊焼き二本が握られていた。

結構な量だ。今日は休んで家の用事で夜は食べている様子だったが胃袋の容量は底なしの様だ。

「夜は食べなかつたんですか?」

「食べたぞ。でもお上品な味は俺の口には合わないな。こういったジャンキーなもんが食い応えがあつていいもんだ」

山賊焼きを骨ごとバキバキと食べる姿は猛獣を思わせた。学生対魔忍には魚も牛も骨ごと食べるというモノが少なからずおりそういったモノは異能の忍法で栄養を兎に角必要としている。

それを見て知っている為、驚きこそしなかつたがやっぱり市勢を知っている身の上では何とも言えない感情に襲われる。

「旨そうだなそれ、一個くれよ」

「分かりました——はい」

爪楊枝に一つ刺したチーズボールを差し出した。

両手がふさがっている啓二はパクつと一口で口に頬張った。

「うん、……うん。美味しいなこれ、チーズか」

「は、はい」

爪楊枝は一つしか付いていない。まだチーズボールは余っていて、爪楊枝で残りを食べれば間接——。

「……——?!」

頬が熱くなった。何を動揺しているんだ、誰でもあり得る事ではな

いか。

第一に啓二はそんな些細なことを考えるまでの繊細な脳味噌をしていないし気にもかけていない行動だったろう。それもそうだし私も気にし過ぎだ。

でも……それでも、しかし。

「……残りもさし上げます」

「え？ お前が買ったんだろ悪いわ」

「構いません！ 食べてください！」

どうしても踏ん切りがつかず、残りも啓二に突き出してしまおう。最近の私はどうかしている。色ごとに現を抜かすほど軟になってしまったのか。

こんな人並みな幸せを享受できない事はない事は知っていたはずだ。対魔忍になったんだ、冷静で冷徹でなくてはならないのに。

「じゃあ、食べかけで悪いが、これ食べるか？」

先割れスプーンで掬われたソバめしを出してくる啓二。

その行為により顔が赤く染まってしまおう。

(どうしたんですか、私。気にし過ぎです！)

心裡で否定しても感情だけは昂って暴走してしまいそうだった。

哀しいかな、そう考えても口をついて出たのは――。

「……頂きます」

パクつと啓二の持つスプーンに口を付け、ソバめしを頬張っていた。

ただのソバめしだ、塩コシヨウとソースで味付けしただけのいたって普通のソバめしなのに凄くおいしく感じられた。

作りたてで熱く、外気で冷やそうともごごと口を動かして俯いてしまおう。

「どうした？」

「……なんでもありません」

恥ずかしさで顔から火が出そうだった。こんな大胆な行動は今までしたことがない。

如何にかなってしまいそうだ。

そうであつても、この行動で舞の中で何かが満たされてゆく感覚があつた。

「立ち止まっても仕方ない。出店を見て回ろうぜ」

「……はい」

人混みを掻き分けながら歩く啓二に続く。

啓二の背丈は平均身長よりも少し高いくらいだったのだが、舞にその背中がずっと大きく見えた。

出店の明かりに照らされた黒い小紋が際立ち、うなじより覗く素肌の浅黒さは男性特有の色香を漂わせていた。

「あつ……すいません」

人混みからか肩と肩をぶつけ反射的に謝ってしまう。

相手も笑顔で謝罪し歩き去り、何ともいえない雰囲気になっていた私に啓二は手を取った。

「逸れるなよ。混んでるから」

「……はい」

ゴツゴツとした手が私の小さな手を覆い隠していた。肌質もまるで違う手で、しつかりと握っている。

手まで繋いでくれることはないだろうが、ざわざわと心が波打つた。

——恋ひ恋ひてあへる時だに愛しき、言つくしてよ長くと思はば。

そう言いたくなるくらいだ。文字の世界でしか知らない世界を、私は今体験している。

人は満たされることに最良の喜びを得る。

ふと啓二の手が熱いように感じた。その後ろ姿はそう変わらない。しかしその耳は僅かに赤みを帯び、うなじには小さく汗が滴っていた。

クスリと笑ってしまう。

神様、こんな身の上の私ですが、満たされてもいいのですか？。

返答など返ってこない。しかし祈らずにはいられなかった。この時を、この瞬間を少しでも長くしていきたい。

違う民族の言葉、ひとりでに思い浮かび啓示のように返ってくる。

——いつも喜び、絶えず祈りなさい、全ての事に感謝を——

嬉しさに打ち震える心持で出店を回った。

型抜きで啓二と勝負し負けて悔しかった。輪投げで手製の紙で出来た輪で少しずるをして勝手得意げになり、金魚すくいと一緒に並んでする。

「あ」

最中のポイに穴が開き、千切れた最中に金魚がたかっていた。

「惜しかったねお嬢ちゃん」

店主のおじさんは不愛想にポイを回収した。

隣を見ると、啓二は真剣な面持ちでポイを構え、ものすごい勢いで金魚をすくい上げていた。

器から金魚が溢れ出るほどすくいどうだという風に親父に不敵な笑顔を向けるが、張り紙に『一人二匹まで』と書かれた張り紙に肩を落とした。

「ほら」

袋に詰められた金魚を渡してくる。

「啓二が取ったですよ。いいです」

「買ったかったんだろ？ すくってた顔見てらわかる」

赤と金の二色模様の金魚が袋の中で優雅に泳いでいた。屈託のない目を私は覗き込んだ。

「確かに記念に一匹欲しかったが、どうしても彼に悪いように思え返そうとしたとき頭に上に手が乗った。」

「欲しいなら欲しいって言えばよ、今の俺は羽振りがいいんだ」

まるで子供をあやす様に頭を撫でられくすぐったかった。

そうであっても、今まで親にも頭を撫でられたことなんてなかった。

きつと家族とはこういう感じなんだろうと、頬が綻んだ。

「ありがとうございます。啓二」

「ツ……、ああー」

満面の笑顔で返してくる啓二の姿に私も笑い返した。

時間も夜更けに近づき出した頃合い、私たちは存分に雨天祭を楽し

んでいた時だった。

「いたっ！ 啓二ちゃん。舞ちゃん！」

大声で呼ばれ振り返ればそこには訓練教官である井河さくらが息を切らせて走ってきていた。

浴衣を来て雨天祭を遊ぼうとしていたことは分かるが、その表情は遊んでいたにしては固く、緊張している。

「どうしたんですか？ さくら教官」

私は飲み物を渡して息を落ち着かせる。

「ちよつと来て！ 緊急事態なの！」

その言葉に浮ついた感情が一瞬にして凍り付いた。

任務。対魔忍の本業が今。

案内されるがまま私と啓二は、表参道を登っていき行く先は沙流鳶屋敷へと。

入口で足止めを食らう人物たちが見え、その人物は井河アサギ、そして対魔忍の『総司令』山本信繁がいた。私たちが到着した途端に門の両端に立っていた警備が道を開く。

「あの、校長どうしたんですか？」

私はアサギ校長に質問する。鋭い目つきで沙流鳶屋敷の母屋に向かうアサギ校長はその剣呑とした雰囲気で答えた。

「少し込み入った任務が入ったの。任務地は北東の択捉上空『タカマガハラ』よ」

## 鵠の血

奥へ、奥へ、さらなる深みの奥へ。

人一人がようやく通れる幅の道の行く先は真つ暗で手に持つ提灯だけが周囲を照らせる照明だった。

冷たく肌名を撫でる空気は体温を奪って、俺たちを凍えさせ体を震わせる。

だが、俺たちはその歩みを止めることをやめず、その先へと落ちて往く。

山をくり抜いて作られた道は、密教信仰のそれを大いに受け家督を継ぐ俺とそれを見届ける親父殿と琉子衆棟梁の三人、そして見届け人として井河アサギを迎えた六人だけだった。

この先の奥宮で俺は、『篠原啓二』は本当の意味で『沙流鳶啓二』と成る。

『参られい、魅入られい——』

最前を歩く虎二の声が呪文のような抑揚のない声で響いた。

提灯の中から僅かに立ち上る煙は妙な臭いが混じっている。それもその筈、意識を変性し混濁させある種のトランス状態にするためだ。

神懸かると誰かが言った、神や、悪魔が憑いたと思わせる意識の混乱は——実際にそれに類する者たちを呼び寄せる。

「……参られい、……魅入られい」

俺の口からついて出た言葉とともに意識が削られていく感覚がある。

どこか朦朧とした感覚があった。頭がふらふらと揺らめいて、世界が廻る。

この体に眠る忍術、違う、奴を引っ張り出すために固く搔掛けられた意識の呪詛を緩めるために抗する必要があるのだ。

体を廻る対魔粒子は奴の吐息。俺の、沙流鳶の家の血に巣くう魔族

——鵠を呼び起こすための。

「何事だ？」

沙流鳶屋敷の喧騒でかき消されそうになった俺の緊張は、襖の先にいる親父殿の声で引き戻された。

「ご多忙のところ恐れ入ります。山本信繁でございます」

廊下に正座し、深々と頭を下げる山本部長の姿に如何に対魔忍界限で沙流鳶の家名が重要かを再認識させられる。

この人も相当なポストに収まった偉い人なのだが、ここまで下から出る姿はまさに想像していなかった。そしてその隣で同じ態勢で平伏する姿の二人、アサギ校長と、さくら先生の姿に俺も親父殿に対して流石に怯んでしまう。

姿を見せないまま声が返ってくる。

「久しいな信繁。何用だ？」

「タカマガハラより緊急の依頼がございました」

「あそこからのお……、三龍五兵八陣に不備はないはずだ」

「それを崩そうとする動きが近年激しくなっております、我々もあの陣に触れることは畏れご協力をお願い申し上げます」

「俺の血肉と、巨人の足を、沙流鳶が知識を得てまだ不服か？」

押さえつけるような声が、俺たちに押し掛かり否が応でも頬に冷たい汗が伝った。

俺の隣に座る舞ですらその顔からは精気が失われつつあった。

そつと背中を撫で落ち着けせようとした。僅かに傾けた顔で、微かに笑いありがとうと声なく舞は答えた。

「陣の不備ではありません。この度はタカマガハラに蔓延る無頼の輩の対応にE&S社より要請があり、お伝えに上がりました」

「先陣を俺に決めよと？」

「……恐れながら」

タカマガハラ。

北東の島、択捉島の上空に建造された超大型上層構造居住人工都市の総称だ。

土地の歴史的に現在も露帝と領土争いが続き、その隙を突かれ魔族

の流入を許し現在日本の数か所ある行政麻痺の違法都市となっている。

だが、あの都市は特殊な成り立ちから臨時行政があり形だけであろうとも一般人の居住が可能だと聞く。

対魔忍という職業柄、そういった違法都市、廃棄都市の情報はいち早く知ることができ、北東の地であったとしても風の噂程度は啓二も耳にしていた。

「その無頼の輩とやらは、なんだ？ 魔族か、異形か？」

「人間でございます。対魔技術の得た、ゲリラ部隊と」

「米連の自治化であろう。沙流鳶の祝いの席にわざわざ持ち込む話でもない」

「その輩の動き、少々妙でありまして」

その発言に、小さなため息のような声を漏らした親父殿が聞く。

「ほう、妙とは」

「三龍五兵八陣の面となる龍脈を象った蒸気伝達線を破損させているようなのです。現状の動きから見ても狙いは孤立した虚岩モリスの破壊かと」

「そういった話は、琉子衆より入っておらぬがなあ。何故だと思いう信繁？」

白々しく聞いてくる親父殿の声は嘲笑しているような色を孕んでいた。

深く頭を下げた山本部長の不動なる姿が僅かだが揺らいだ気がする。非難されているとう自覚があるからだ。本来、タカマガハラの際は日本政府が取り仕切る筈であった。

しかし、現状で東京キングダム、アミダハラやトミハラ、アマハラなどの違法都市の数々の治安維持が成されていないこともあり、それに付け込まれ自治権を米連の民間軍事委託会社『イーグル&サンクチュアリ社』に取られてしまったのだ。

米連としても鎖国状態の露帝の動向を探るためタカマガハラに軍隊を差し向けたのが真意であるが、表向き日本と米連は友好国だ。民間委託という形で自治権を得ているのだ。

本来タカマガハラは治安維持をするための日本の武力は蚊帳の外、タカマガハラの下、択捉島に追いやられている。

そのせいもあつてか、タカマガハラは日本の領土でありながら実質的な他国状態。治外法権の土地なのだ。その影響もあり琉子衆もタカマガハラへの登昇は困難を極めている。

親父殿はその国際的な手腕の不手際を非難し、嘲笑しているのだ。「我々としても、択捉に封印した第四号魔界門の管理に人員を割かれ、この様な事に」

「以後慎め、俺もそう願おう」

この話の手綱を握っているのは親父殿だった。全てに措いての決定権を持ち、その気になれば生殺与奪の権利すら持ち合わせていた。

沙流鳶屋敷は沙流鳶の頂点である親父殿の手足として動く分家衆が集結している、そして何より親父殿も脅威的だった。

「まあいいさ、お前の働きは平時より知っておる。そう委縮するでない、ちよつとした冗談だ」

あまり冗談なっていない。さくら先生が安堵のため息を付いたのを俺は聞き逃さなかった。

楽しい親父殿の含み笑いの声が耳に届いた。

「井河の次女も来ておるのか？」

「はい、井河さくら、井河アサギとも共、必要かと思ひ連れてまいりました」

「ふうん。現対魔忍総隊長であるアサギもなあ、その手際の良さ、もはや俺に相談するまでもなく人選は決まっておるのだな？」

アサギ校長の軽い目配せが俺と舞に向けられた。正座の状態で襖ににじり寄り平伏する。

「篠原家、長男。篠原啓二、推参いたしました」

「七瀬舞。召還に応じ参りました」

親父殿は沈黙で答えた。暫時の間があり声が返ってくる。

「……信繁、選抜した篠原の家の長男。事情を知らぬわけではなからう？」

アサギ校長が答える。

「今回の人選、私が選ばさせ頂きました。タカマガハラという構造的な事情を考え、火遁や雷遁、大規模な攻撃力は都市の崩壊を招きかねない。確実な制圧力と日本国と米連との軍事摩擦を避けるための人選です」

対魔忍とは国際社会の観点から見れば優秀な諜報員であると共に、絶対的な殺傷性を持った兵器だ。そのことから対魔忍の派遣は、戦闘機や戦車、空母を送り込むことと同義であり明確な軍事行動なのだ。俺たちは実戦を経験しているが、現役の者たちと比べればまだまだ露出の少ないヒヨッコだ。

その為の人選。他の目にまだまだ触れていない事こそ国際間での本当に表に出したくない暗部の仕事をやらせる口実だった。

ありていに言えば鉄砲玉と変わりはしない、しかし本来の対魔忍の『忍者』としての機密性と諜報の側面を考えれば当然と言える。

「答えになっていないな。が、良しとしよう」

「寛大なお心に感謝します」

襖に移る親父殿の影が揺らめき、こちらに顔を向けた。

「作戦の開始はいつほどに？」

「早ければ早いほど良いかと。火急の事案のため、米連方も焦りをのぞかせています」

「とうとうっ」

「国連のUNOTAH作戦のカウントダウンの再開をE&S社が要請したと、外務省より通達がございました」

「……………」

沈黙で返答する親父殿。俺はUNOTAHという単語に疑問が浮かぶ。

UNは国際連合とし、OTSHはなんの頭文字だ？。

疑問に頭を捻っているとき、親父殿の冷徹な声が響いた。

その声は怒りの色を孕んだ憤る声だった。

「日本を二度も焦土にすることは赦さぬ。今回のE&Sの不屈き、我々が拭おうではないか」

「ありがとうございます」

廊下の端より現れた琉子衆たちが屋敷からの退場を促してくる。

この土地の主は沙流鳶利家であり、拒否する権利は総理大臣にもま  
してや天皇陛下ですら持つていない。

静かな声で俺と舞の派遣の返答が返ってくる。

「猶予を三日とする。その間にその二名の身边を整理させることだ」

深層の奥宮へたどり着いたぼくたちは肅々と明かりを祭壇に灯し  
ていた。

薄暗い祭壇の広間は巨大な一つの巨岩の中をくり抜いて作られて  
おり、風水学にのっとり配置された蝋燭たちはあまりよろしくない場  
所に配置されている。

この祭壇の構造も、卵を象っておりいま睥ろうする当主を呪術的に  
呪う為にこの場所は創られている。

全てはぼくの、沙流鳶の当主になるべく作られた呪いを授ける場所  
なのだ。

「本日これより、鶴の血の引継ぎを執り行う。壇の上に、肉を」

琉子衆棟梁たちはその腰から下げた袋から儀式に必要とされたも  
のを設置してゆく。

左寄り下段より虎の足、狸の胴体、蛇の亡骸を設置し、玉座に親父  
殿が腰を掛けた。

どれからも漂う気の間が尋常ではない。魔族から筆り取った生  
贄の方式の儀式だった。

虎の足、あれは九州に渡ってきた騮虞の脚だ。狸の胴体は四国の刑  
部狸の序列になる魔力を帯びた狸の胴体だ。蛇の亡骸は蝦夷地に住  
む神『ホヤウカムイ』に転身前に仕留めた物だろう。

どれも魔力を帯び、呪術的に重要な物品であることは疑いようがな  
い。

上座の祭壇に腰を落ち着けた親父殿、その体は神域の獣『赤狒々』の  
体だ。

——虎、狸、蛇、猿。

そのすべてが合わさるとき天帝にあだ名す獣なる。

俺は胸元に収めたあるものを取り出し祭壇の前に置いた。

戒名だ。

「鶴纏院覚志啓飛居士よ。鶴を継ぐ気にあるか」

親父殿はそう俺に問う。もはや無用な問答である。

「僭越ながらその栄誉にこの軀からだを差し出さん」

背に担ぐ虚残剣を引き抜き、親父殿に切っ先を向けた。

刀身に走る赤黒い静電が音を鳴らし、俺の体に纏わりつく。

この刀に刻まれし言霊を諳んじる。

——逢佛殺佛 逢祖殺祖 逢羅漢殺羅漢 逢父母殺父母 逢親眷

殺親眷 始得解脱 不與物拘 透脱自在——

仏に逢うては仏を殺す、先祖に逢うては先祖を殺す、悟りを得た者に逢うてはその者を殺す、父母に逢うては父母を殺す、親族に逢うては親族を殺す、全ては一点の極致に至る道。

刀を振るい、俺は神楽を舞う。

俺の体に今宿っているのは神でもなく先祖の霊でもない、血に刻まれた鶴の気であり意識はすでに執着より抜け出している。

蠟燭の煙の影響で朦朧とする意識の中で、その感覚に身を任せる。

荒れ狂う衝動、殺意や悪意、そういった負のとは無縁のただ純粹なエネルギーのような暴れる感覚が俺を揉み砕く。

その意思に目的はない、そこに生じてただそのエネルギーを発散するだけの存在。要因もなければ理由もない。ただあるだけのエネルギーを俺は受け入れる。

その意思に俺は意志を与え、方向づける。無から意味を見出しそれに意味を与えつける。

汝なんぞや。我は人なり、影より人を護りし闇なり。

供物の魔力が俺の体に流れ込む。

鶴成る器。それに満たさる力を御さん我は真に人といえるか？。

愚門、我は人なり——人として生を受けし肉袋なり！。

刀を振り下ろし神楽を終らせた。翳む視界の先にいる親父殿の姿がいつもより大きく感じる。

「よくぞ継いだ、啓二。俺の血より鶴が抜け去りお前の代に引き継がれた」

眼を擦り、その視界が鮮明さを取り戻した。

赤狒々の姿が消え失せ、そこに座していたのは俺と顔つきが似た男性であり、古い記憶の底にいた親父殿その人だった。

「血集めの儀、これにて終了とし俺は本日今の時をもって沙流鳶家当主の座を降りるぞ」